第２節　縄文時代の調査

１　概　要

縄文時代は、早期末から中期初頭にかけて狩猟場として落とし穴が形成された後、中期を中心に集落が営まれたことが窺える。検出された主な遺構は掘立柱建物跡４棟、集石土坑７基、落とし穴25基、土坑14基である。丘陵西側斜面にあたる西区の分布密度がやや高く、東区では散漫な分布状況を示す。

掘立柱建物のうち、東区の掘立柱建物１は後期の竪穴住居である可能性も残すが、西区で検出された３棟は晩期に帰属する小型の倉庫群と考えられる。

集石土坑は東区Ｃ区に２基、西区に５基分布している。そのうち、中期に属する４基は径1.5～2.0ｍ前後の円形、または楕円形を呈する大型の掘方を持ち、被熱した礫と埋土に炭化物や焼土を多く含む点で共通する。性格は明確にしえないが、炉などが可能性として考えられる。仮に炉であった場合、縄文土器や石皿、凹石などが出土していることから調理等に関わる日常的な機能を考えたい。集石土坑５のみが晩期に属し、中期の集石土坑とは性格を異にする可能性が高い。

落とし穴は東区に10基、西区に15基分布する。西区の分布密度が高く、丘陵肩部の傾斜変換点付近に計画的に配置されたようすが窺える。形態は円形や楕円形、方形など各種が確認され、底面ピットも各形態で有無がみられる。時期は放射性炭素年代測定に依拠すれば、早期末から前期を主体とするが、落とし穴21のみは中期初頭と判断されている。

遺物は西区谷部に堆積する遺物包含層から中期を中心とする多量の縄文土器が出土している他、5,000点を超える黒曜石・安山岩製石器、礫石器が出土している。黒曜石・安山岩製石器は石器製作時に生じた剥片や石核も多量に出土しており、近傍で集落に付随して大規模な石器製作が行われたと考えられる。東区からの出土遺物は僅少であるが、Ａ区で早期の押型文土器が目立ち、Ｂ区で草創期の有茎尖頭器が１点出土している。

２　掘立柱建物跡

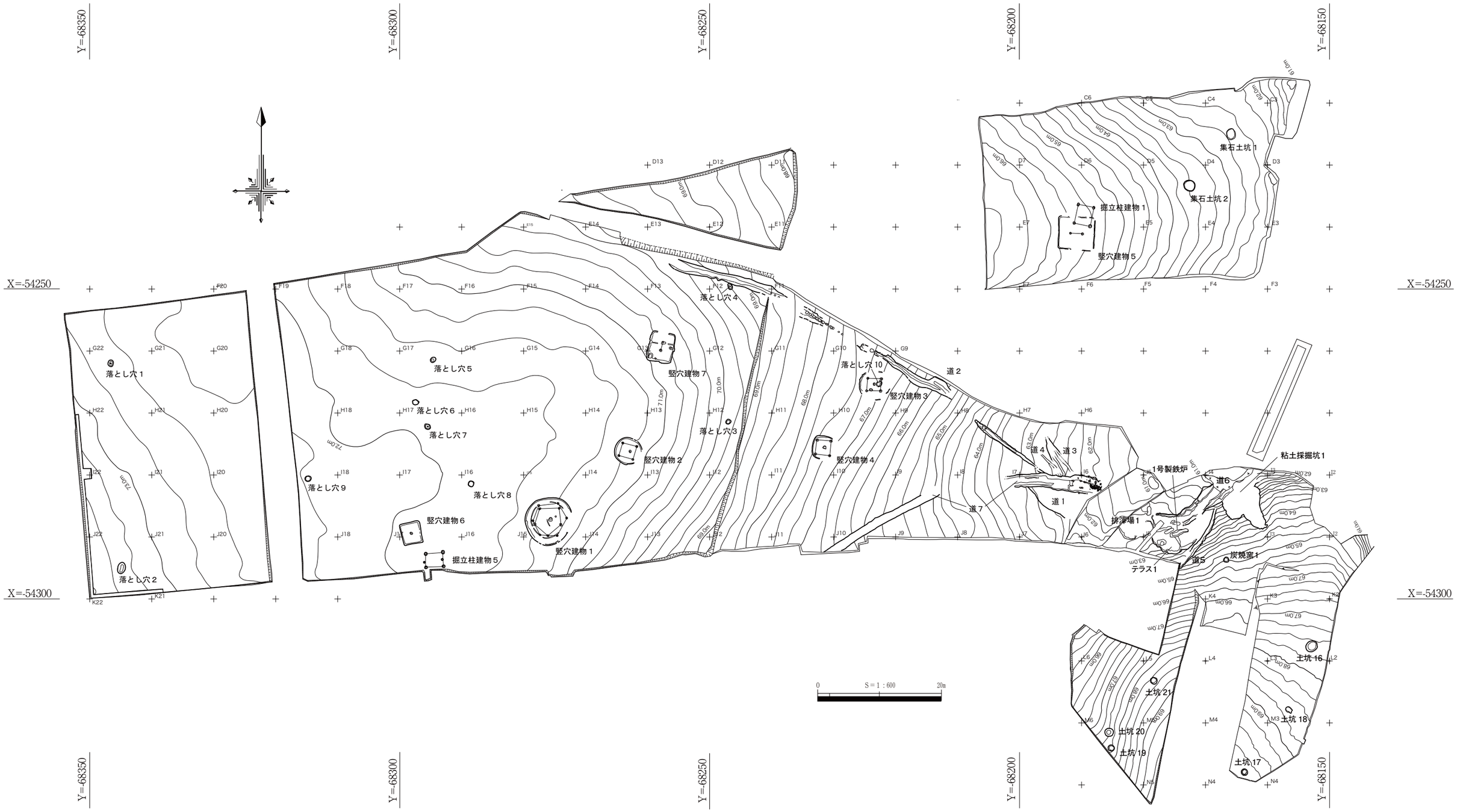
掘立柱建物１（第12･13図、PL.5-1）

東区Ｃ区、Ｄ５・６グリッド、標高65.6ｍの緩斜面に位置する建物跡である。古墳時代中期の竪穴建物５と重複する位置関係にある。周辺の検出面は著しく削平されていることから、本来は竪穴建物跡であった可能性もある。

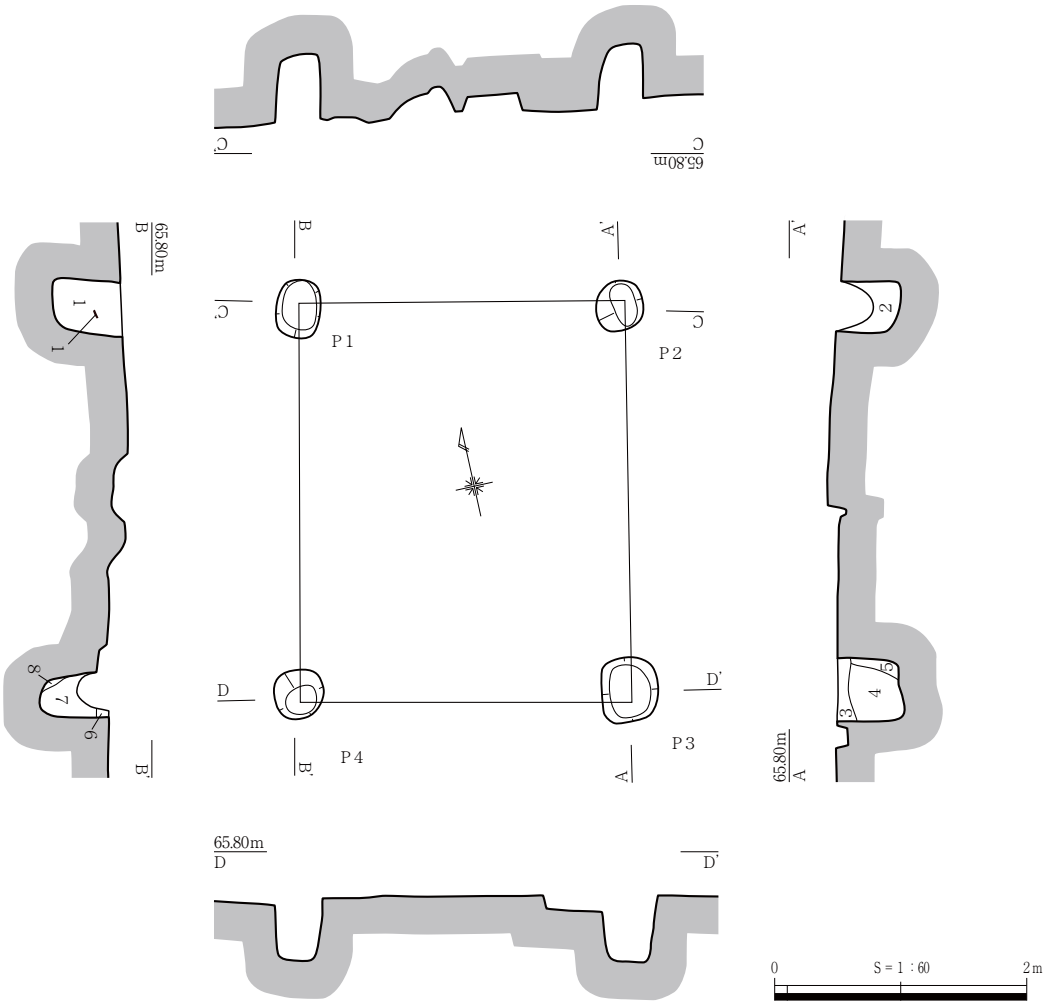
桁行１間（3.2ｍ）、梁行１間（2.1ｍ）の建物で、方位はN-14°-Wである。柱掘方は径40～50㎝程の円形を呈し、深さは50～56㎝である。柱穴の埋土は黒褐色土を主体とし、柱痕跡は確認できていない。

出土遺物は柱穴Ｐ１、Ｐ２から縄文土器片が１点ずつ出土している。Ｐ１からは、２条沈線文が施される深鉢１、Ｐ２からは、粗製深鉢２が出土している。１は、島２式（中津・福田KⅡ式土器様式第３様式新段階）併行期と考えられ、縄文時代後期初頭頃のものと考えられる。

ただし、放射性炭素年代測定では２σ暦年代範囲でＰ２底面付近から出土した炭化物が41calBC-75calAD（95.45%）、Ｐ３埋土下層から出土した炭化物が1,220calBC-1050calBC（86.1%）という結果



第11図　赤坂小丸山遺跡東区遺構配置図



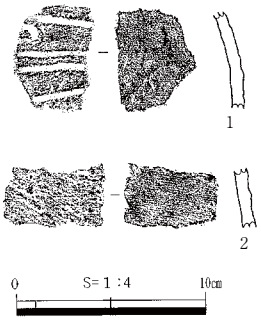
P１
１　黒褐色土（7.5YR2/2）しまり弱、粘性やや弱。ローム粒含む

P２
２　黒色土（7.5YR2/1）しまり弱、粘性やや弱。
　径１cm 以下のロームブロック多く含む。

P３
３　にぶい褐色土（7.5YR5/4）しまり強、粘性やや強。
　ロームと褐色土の混土。**竪穴建物５貼床**
４　黒色土（7.5YR2/1）しまり弱、粘性やや弱。ローム粒少し含む。
５　暗褐色土（10YR3/3）しまり弱、粘性やや弱。
　２層と径４cm 以下のロームブロックの混土。

P４
６　にぶい褐色土（7.5YR5/4）しまり強、粘性やや強。
　ロームと褐色土の混土。**竪穴建物５貼床**
７　黒褐色土（7.5YR2/2）しまり弱、粘性やや弱。
　径１cm 以下のロームブロック多く含む。
８　暗褐色土（10YR3/3）しまり弱、粘性やや弱。
　２層と径１cm 以下のロームブロックの混土。

第12図　掘立柱建物１



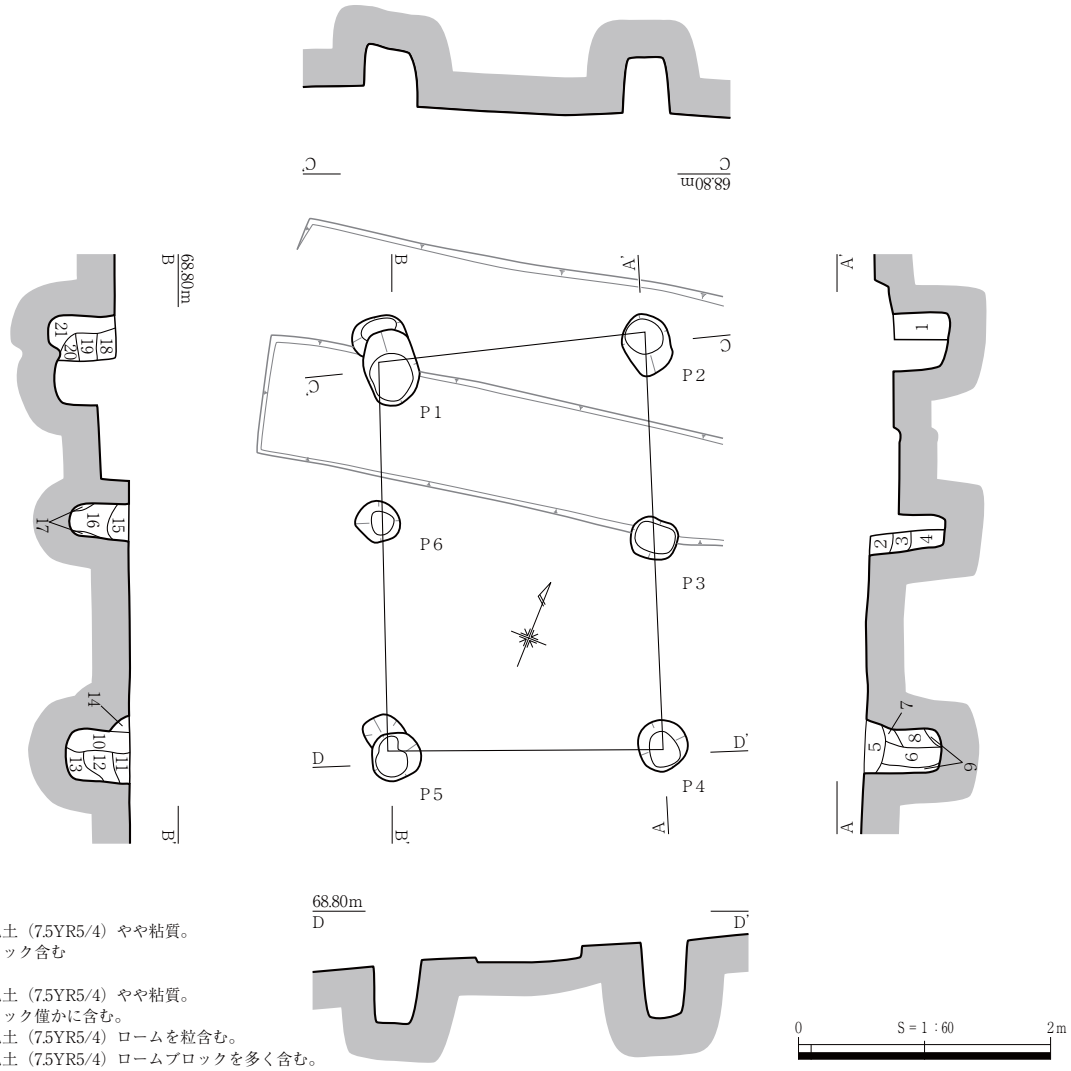
第13図　掘立柱建物１
出土遺物

が得られており、土器の年代観と齟齬を生じている。

掘立柱建物２（第14･15図、PL.5-2, 37）

西区 J31 グリッド、標高 68.6 mの丘陵平坦部に位置する掘立柱建物跡である。桁行２間（3.1 ～ 3.3 m）、梁行１間（2.2 m）の側柱建物で、方位はN -22° - Wである。平面積は 7.2㎡を測る。柱掘方は 35 ～ 58㎝の円形を呈し、深さは 45 ～ 50㎝である。Ｐ４、Ｐ５の断面観察から柱の径は 15㎝前後に復元される。遺物は図化しえなかったが、Ｐ１、Ｐ３から粗製土器深鉢の細片が出土している。

出土遺物から本建物の詳細な時期を特定することはできないが、掘立柱建物３、４と建物の方位がほぼ同じであることから、縄文時代晩期後半と考えられる。



P2
1　にぶい褐色土（7.5YR5/4）やや粘質。
　ロームブロック含む

P3
2　にぶい褐色土（7.5YR5/4）やや粘質。
　ロームブロック僅かに含む。
3　にぶい褐色土（7.5YR5/4）ロームを粒含む。
4　にぶい褐色土（7.5YR5/4）ロームブロックを多く含む。

P4
5　黒褐色土（7.5YR3/2）
6　暗褐色土（7.5YR3/3）径２mm 以下のローム粒を僅かに含む。
7　褐色土（7.5YR4/3）径３cm 以下のロームブロックを含む。
8　褐色土（7.5YR4/4）
9　褐色土（7.5YR4/4）径３cm 以下のロームブロックを含む。

P5
10　黒褐色土（7.5YR2/1）粘性あり、しまり弱。径５mm 以下の炭化物粒少し含む。
　径２mm 以下の橙色土粒を多く含む。
11　暗褐色土（7.5YR3/3）粘性あり、しまり普通。径２mm 以下の黄褐色土粒を僅かに含む。
12　暗褐色土（7.5YR3/3）粘性あり、しまりあり。径２cm 以下の黄褐色土ブロックを含む。
13　暗褐色土（7.5YR3/3）粘性あり、しまり弱。ロームブロック僅かに含む。
14　褐色土（10YR4/4）

P6
15　暗褐色土（7.5YR3/3）粘性あり、しまりあり。
　径３cm 以下のロームブロックを含む。
16　暗褐色土（7.5YR3/3）粘性あり、しまり弱。
17　暗褐色土（7.5YR3/3）粘性あり、しまりあり。
　径３cm 以下のロームブロックを含む。

P1
18　にぶい黄褐色土（7.5YR5/4）ロームブロック僅かに含む。
19　にぶい黄褐色土（7.5YR5/4）やや粘質。ロームブロックを少し含む。
20　にぶい黄褐色土（7.5YR5/4）やや粘質。
21　暗褐色土（7.5YR3/3）しまり弱、粘性やや強。
　径５mm 以下の AT ブロックを含む。

第14図　掘立柱建物２

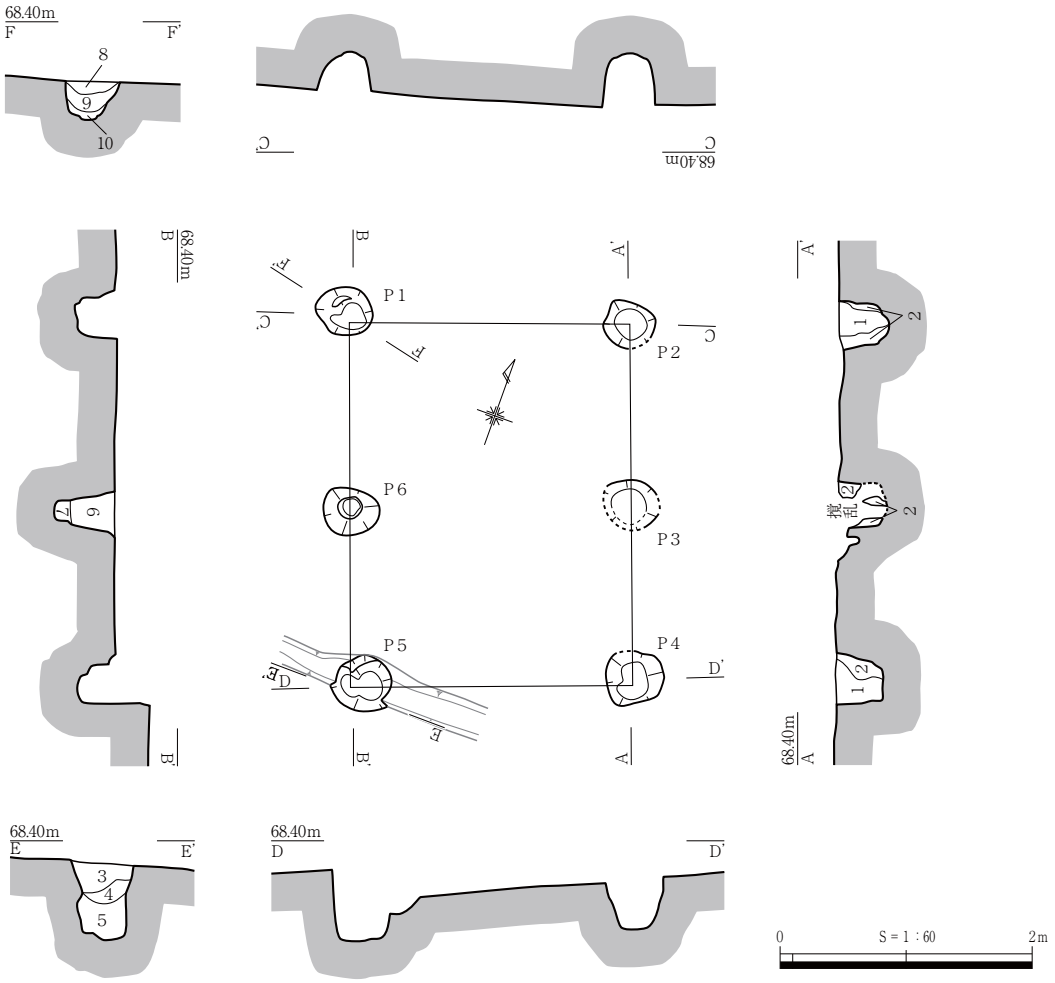
第15図　掘立柱建物２
出土遺物

掘立柱建物３（第 16･17 図、PL.6-1, 37）

西区 K30・31 グリッド、標高 68.2 m の丘陵平坦部に位置する掘立柱建物跡である。桁行２間（2.9 m）、梁行１間（2.2 m）の側柱建物で、方位は N -20° - W である。平面積は 6.4㎡を測る。柱掘方は 40 ～ 45㎝の円形を呈し、深さは 35 ～ 45㎝である。Ｐ２、Ｐ４の断面観察から柱の径は 20㎝前後に復元される。

遺物はＰ６から突帯文土器が出土している。口縁直下に刻目貼付突帯をもち、濵田編年晩期Ｖ期頃に比定される。

したがって、本建物の時期は縄文時代晩期後半頃と考えられる。



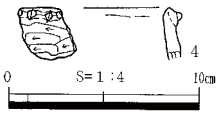
P２～P４
1　暗褐色土（7.5YR3/3）粘性強、しまり弱。径１cm 以下の炭化物・ロームブロックを僅かに含む。
2　褐色土（7.5YR4/3）粘性強、しまり弱。
　径１cm 以下の炭化物を僅かに含む。径１cm 以下のロームブロック多く含む。
P５
3　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり中。径１cm 以下のロームブロック少し含む。
4　暗褐色土（10YR3/4）粘性・しまり中。炭化物粒・橙色土粒を僅かに含む。
5　暗褐色土（10YR3/4）粘性中、しまり弱。黄褐色土粒を多く含む。
P６
6　灰褐色土（7.5YR4/2）やや粘質。ロームブロックを少し含む。
7　暗褐色土（7.5YR3/3）粘性中、しまり強。径５mm 以下の黄褐色ロームブロックを多く含む。
P１
8　暗褐色土（10YR3/4）粘性・しまり中。径５mm 以下の炭化物・ロームブロックを僅かに含む。
9　褐色土（7.5YR4/3）粘性・しまり中。径５mm 以下のロームブロックを多く含む。
10　暗褐色土（10YR3/4）粘性中、しまり弱。径５mm 以下の炭化物・ロームブロックを僅かに含む。

第16図　掘立柱建物３

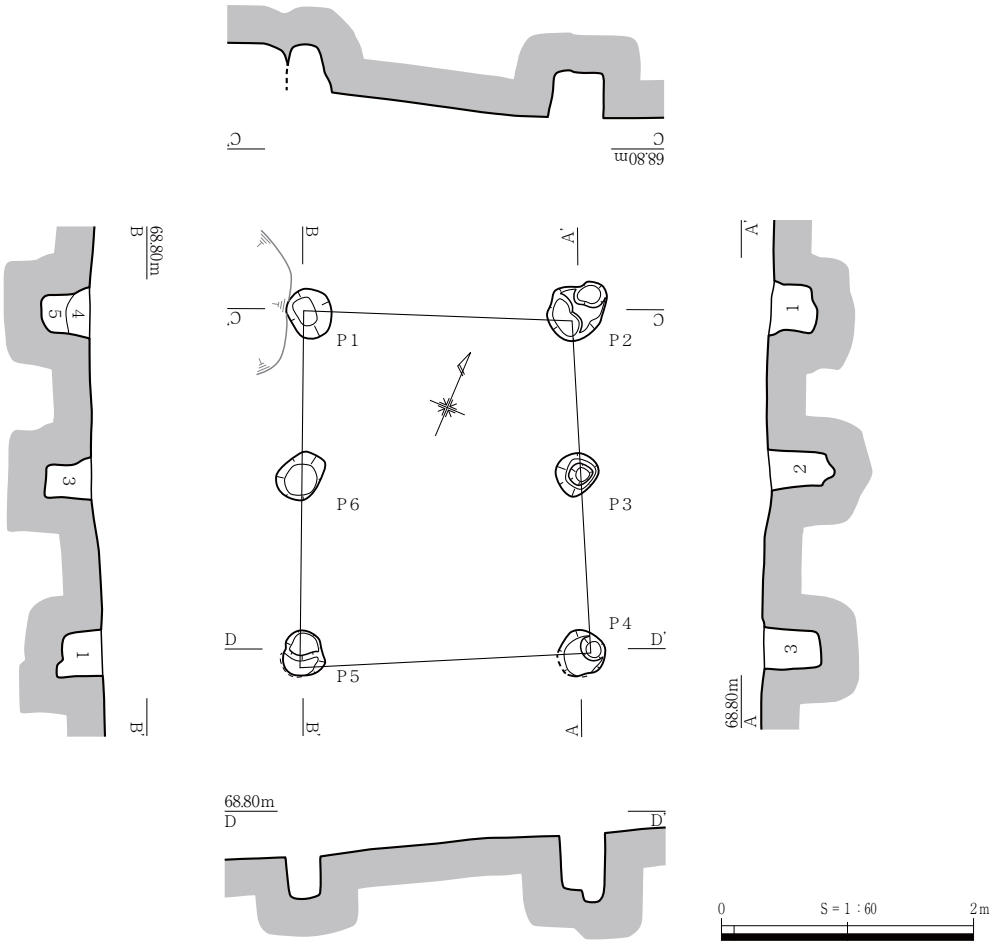
掘立柱建物４（第18図、PL.6-2）

西区 K31 グリッド、標高 68.5 mの丘陵平坦面に位置する掘立柱建物跡である。桁行２間（2.6 ～ 2.8 m）、梁行１間（2.1 ～ 2.3 m）の側柱建物で、方位はN -20° - Wである。平面積は 4.7 ～ 6.4㎡を測る。柱掘方は 30 ～ 50 ㎝の円形を呈し、深さは 30 ～ 50㎝である。土層断面では柱痕跡を確認できなかったが、Ｐ３、Ｐ４の底面には径 20㎝程の柱の当たりを確認することができた。

遺物は出土していないが、掘立柱建物跡２・３と建物の方位がほぼ同じであることから、本建物の時期は縄文時代晩期後半頃の可能性が高い。



第17図　掘立柱建物３出土遺物



1　黒褐色土（10YR3/2）粘性・しまり中。径２cm 以下のロームブロックを少量含む。径５mm 以下の炭化物を僅かに含む。
2　黒褐色土（10YR3/2）ロームブロック・炭化物ほとんど含まない。
3　黒褐色土（10YR3/2）径２cm 以下のロームブロックを多く含む。
4　暗褐色土（10YR3/4）粘性・しまり中。
5　にぶい黄褐色土（10YR4/3）粘性強、しまり中。径３cm 以下の黄褐色ロームブロック僅かに含む。

第18図　掘立柱建物４

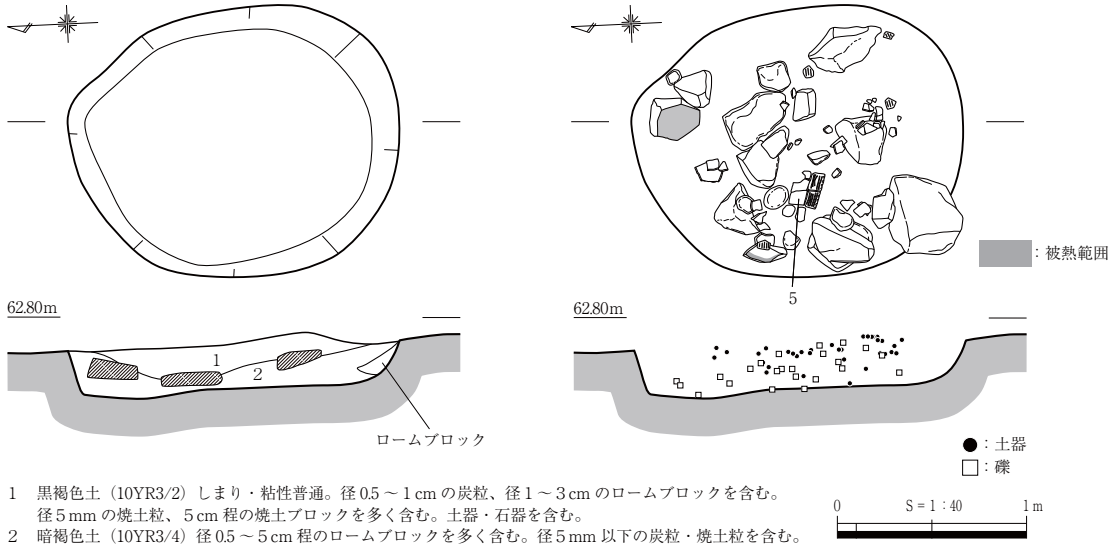
３　集石土坑

集石土坑１（第 19 ～ 21 図、PL.7-1･2, 35･59-2）

東区Ｃ区、Ｃ３グリッド、標高 62.5 ｍの緩斜面に位置する集石土坑である。集石土坑２とは約 10 ｍ離れた位置関係にある。平面形は長軸 1.76 ｍ、短軸 1.42 ｍの楕円形を呈する。深さは最大 28㎝で、底面はほぼ平坦である。断面形は逆台形を呈する。底面や壁面に被熱はみられない。埋土は２層に分層され、炭や焼土を多量に含む。また、ロームブロックも多く含んでいることから人為的に埋め戻された可能性がある。

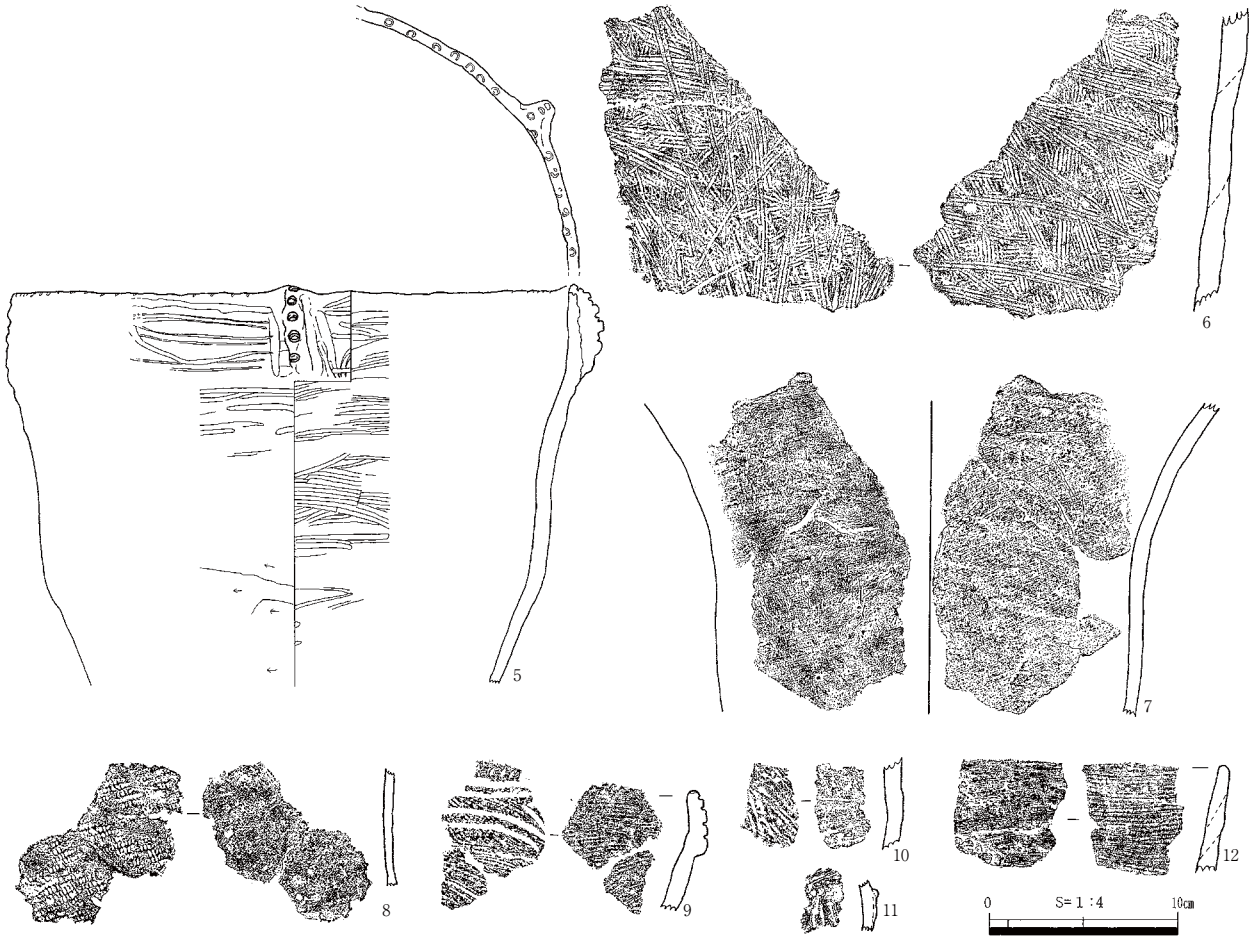
埋土から縄文土器や石器とともに拳大から人頭大を超えるサイズの礫が多く出土している。礫は扁平な角礫が多く、石材はすべてデイサイトとみられる。被熱し赤変している個体も目立つ。礫の出土状況は多くが底面からやや浮いた状態にあり、規則的に配置された様子は窺われない。ただし、壁面に沿って扁平で大きめの礫がみられ、土坑中央に向かって倒れ込むような状態で出土している。中央部は小さめの礫はみられるものの基本的に礫は希薄となり、縄文土器片や凹石等の石器が散らばっている。

図化した出土遺物は縄文土器深鉢５～12、凹石Ｓ１である。５は深鉢で、口縁部外面に竹管による文様が施される縦方向の隆帯や沈線文が施される。竹管文は口縁上端部にも巡る。６は深鉢片で内外条痕が施される。７･10･12は粗製土器深鉢、８は外面LR単節縄文が施される深鉢、11は沈線文、刺突文が施される深鉢である。これらは里木Ⅲ式から北白川Ｃ式併行期と考えられる。Ｓ１はデイサイト製の凹石で、片面に敲打面がある。

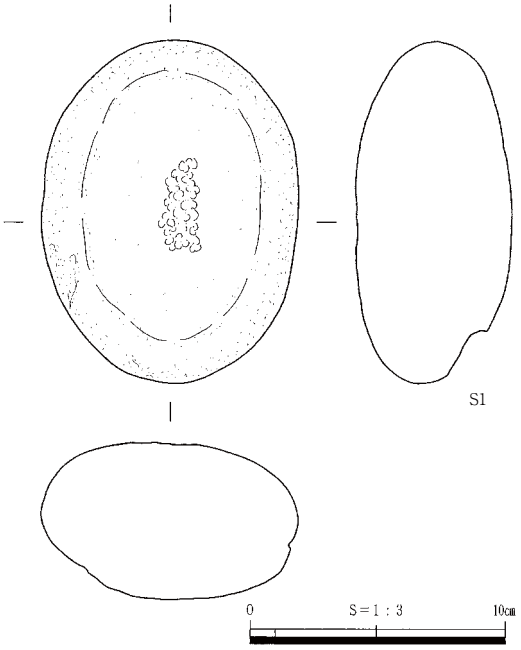


1　黒褐色土（10YR3/2）しまり・粘性普通。径0.5～1cmの炭粒、径1～3cmのロームブロックを含む。径5mmの焼土粒、5cm程の焼土ブロックを多く含む。土器・石器を含む。
2　暗褐色土（10YR3/4）径0.5～5cm程のロームブロックを多く含む。径5mm以下の炭粒・焼土粒を含む。

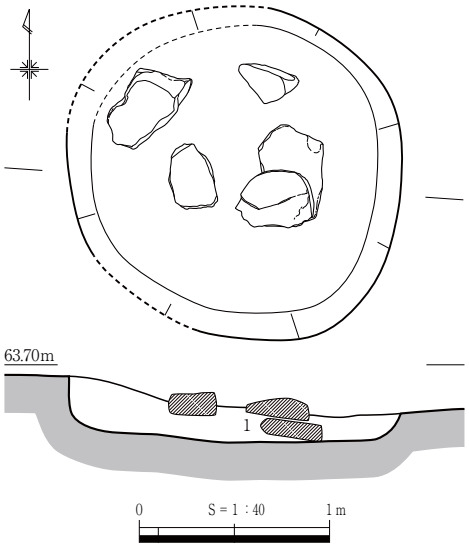
第19図　集石土坑１



第20図　集石土坑１出土遺物（１）



第21図　集石土坑１出土遺物（２）



1　暗褐色土（10YR3/3）しまりやや弱、粘性やや強。
径２cm 以下のソフトローム・AT ブロック多く含む。
炭粒含む。

第22図　集石土坑２

本遺構の時期は出土土器から縄文時代中期後葉と考えられる。また、最下層から出土した炭の放射性炭素年代測定を行ったところ、２σ暦年代範囲で 2814calBC-2678 calBC（69.6％）という結果が得られており、土器の年代観とも矛盾しない。

土坑の機能は明確にしえないが、礫や出土遺物の原位置性が低いことから、まず、廃棄土坑の可能性が想起される。ただし、壁際に沿って礫が巡る点は集石土坑２等とも共通しており、本来は土坑壁面に石囲いのような構造物が築かれていた可能性が高い。したがって､掘方に被熱痕跡はないものの、焼土や炭を含む埋土や被熱礫の出土等も勘案すると当初は炉として機能していたと考えられる。

集石土坑２（第 22 図、PL.9-1）

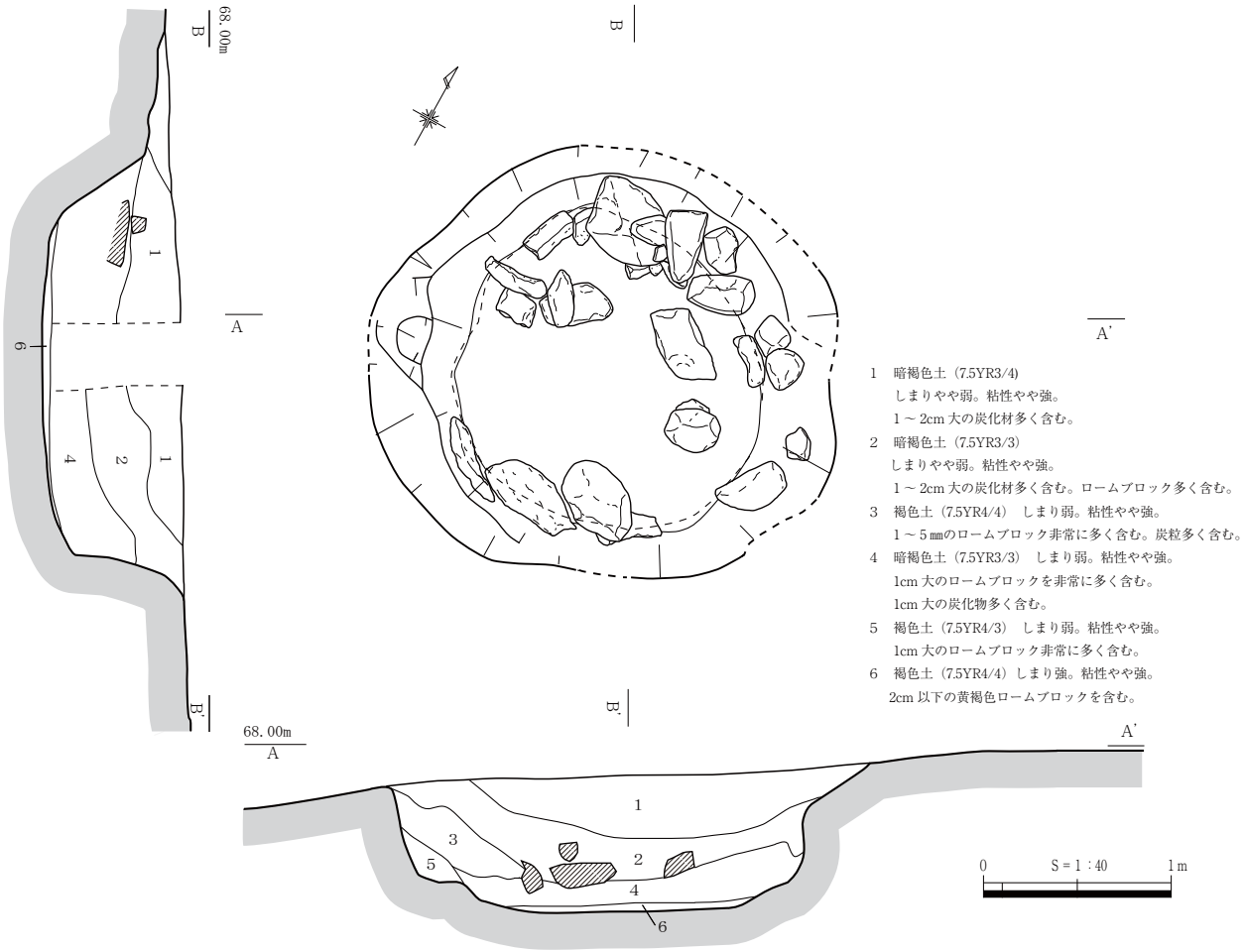
東区Ｃ区、Ｄ４グリッド、標高 63.5 ｍの緩斜面に位置する集石土坑である。集石土坑１は約 10 ｍ離れた位置関係にある。平面形は径 1.7 ｍの円形を呈する。深さは最大 26㎝で、断面形は逆台形である。底面は比較的平坦となる。埋土は単層で、炭を含む。また、ロームブロックも多く含んでいることから人為的に埋め戻された可能性が高い。

埋土から人頭大よりやや大きめの礫が５点出土している。礫は扁平な角礫が多く、石材はすべてデイサイトとみられる。なかには被熱し赤変している個体もある。礫の出土状況は底面からやや浮いた状態にあり、規則的な配置ではないが、全体観は環状を指向している。集石の中央部は空閑地となっており、集石土坑１の礫の出土状況に似る。

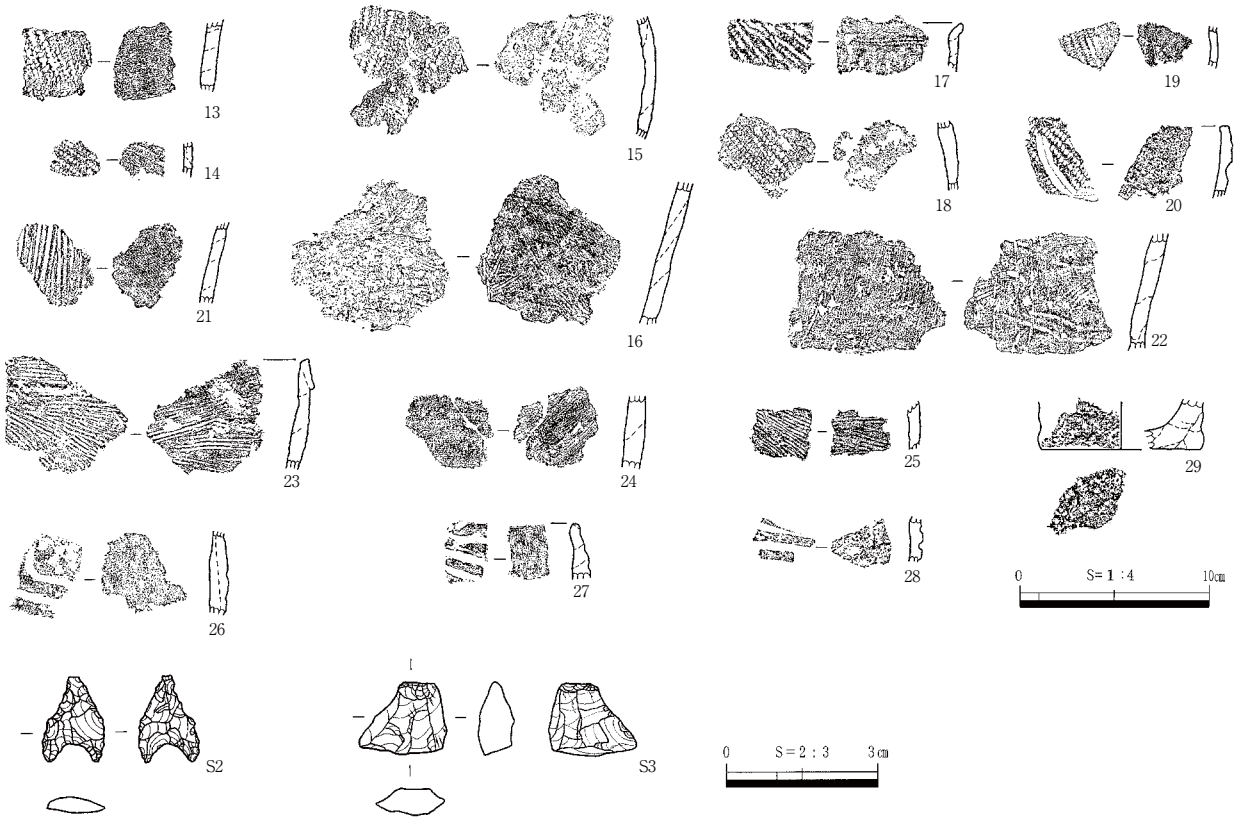
土器は出土していない。埋土から出土した炭の放射性炭素年代測定を行ったところ、２σ暦年代範囲で 2701calBC-2570 calBC（66.9％）という結果が得られた。よって、本遺構の時期は縄文時代中期後葉と推定される。遺構の性格は特定しえないが、集石土坑１等と同様の性格をもつとみられ、本来礫による炉等の構造物が存在した可能性を考えておきたい。

集石土坑３（第 23･24 図、巻頭図版 1-1･PL.8-1･36-1･55-1）

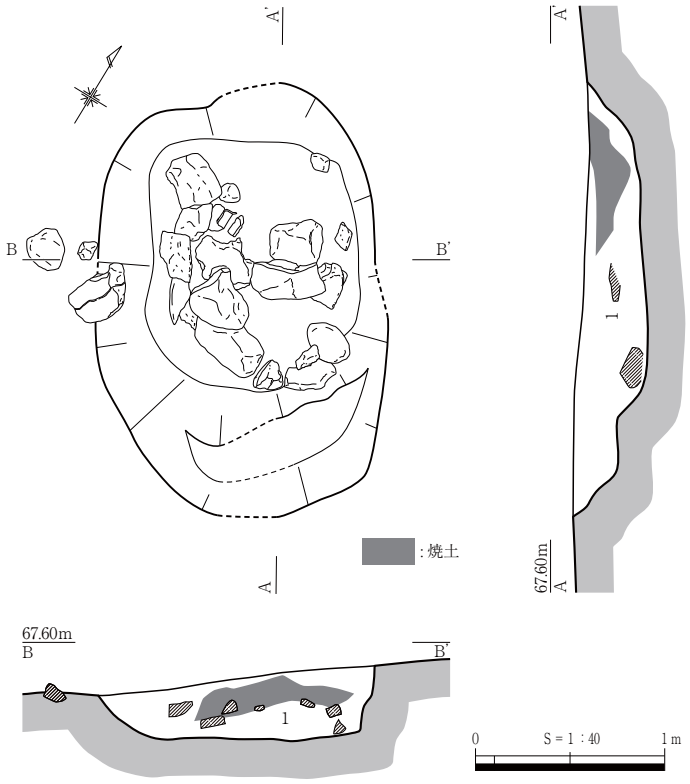
西区Ｊ 32 グリッド､標高 67.7 ｍの丘陵肩部に位置する大型の集石土坑である。平面形は長軸 2.5 ｍ、短軸 2.2 ｍの楕円形を呈し、深さは 70㎝である。底面は平坦で、断面形は逆台形状を呈する。埋土は６層に分層され、最下層の６層は貼床土の可能性がある。いずれの層もロームブロックや炭化物を多



第23図　集石土坑３

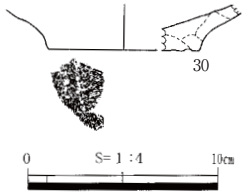


第24図　集石土坑３出土遺物



1　暗褐色土（7.5YR3/3）しまり・粘性やや弱。径１cm 以下の AT ブロック、径５mm 以下の炭化物・焼土粒多く含む。

第25図　集石土坑４



第26図　集石土坑４出土遺物

く含んでいる。

礫は底面からやや浮いた状態で 25 点出土している。円礫が１点出土した他はすべてやや扁平な角礫からなる。石材はすべてデイサイトである。これらの角礫の中にはすべてではないが、被熱による赤変やハジケが認められるものがある。礫の配置は規則的とはいえないが、壁に沿って弧状に出土しており、土坑の中央部は空閑地となる。

遺物は縄文土器と石器が出土している。縄文土器 13 ～ 20 は里木Ⅱ式併行、23 は縄文地ではないが形態的に波子式に類似、21・24・25 は里木Ⅲ式併行、26 ～ 28 は北白川Ｃ式併行とみられる。Ｓ２は黒曜石製の凹基無茎石鏃、Ｓ３は楔形石器である。

本遺構の時期は出土遺物から縄文時代中期中葉から末葉と推定される。なお、埋土から出土した炭化物３点について放射性炭素年代測定を行っている。試料№.12 では２σ暦年代範囲で 2,821calBC-2,630cal BC（76.9％）という結果が得られており、出土土器の年代観とも整合的である。

本遺構の性格については、礫の配置状況から何らかの構造物が築かれていた可能性があり、掘方自体に被熱痕跡はないものの、炭化物を含む埋土や被熱礫の存在を勘案すると当初、炉として機能していた可能性を考えておきたい。

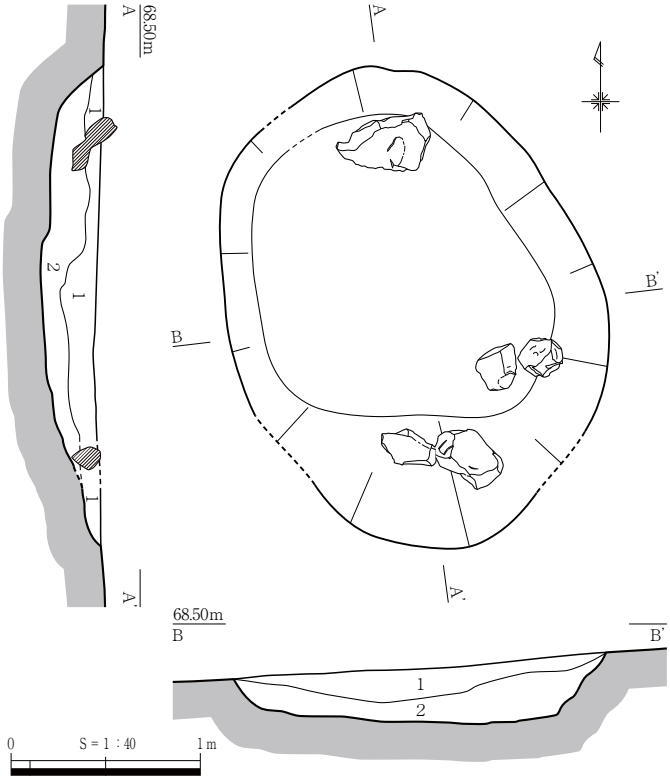
集石土坑４（第 25･26 図、PL.8-2）

西区Ｊ 32、33 グリッド、標高 67.5 ｍの丘陵肩部に位置する集石土坑である。集石土坑３とは西側に５ｍ離れた位置関係にある。平面形は長軸 2.15 ｍ、短軸 1.5 ｍの楕円形を呈する。深さは 40㎝で、底面は皿状を呈する。埋土は焼土ブロックや焼土粒が多量に含まれており、炭化物も多い。

礫はほぼ底面直上から 22 点出土している。礫の構成は集石土坑３と同じく円礫が僅かに含まれている他は角礫で、石材はすべてデイサイトである。礫の一部には被熱による赤変やハジケが認められる。礫は土坑中央部に集積されたような状態で出土しており、集石土坑１～３とは出土状況が異なる。

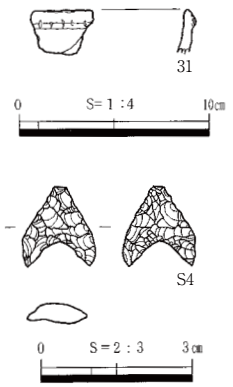
出土遺物には、図化したものは縄文土器底部片 30 がある。しっかりとした平底の底部である。遺構の時期は詳細に特定できないが、縄文時代中期から後期と推定される。

遺構の性格は他の集石土坑とは礫の出土状況が異なるが、当初の機能としては同様に炉などが可能性として考えられる。



1　暗褐色土（10YR3/4）しまり・粘性中。径５cm 以下のロームブロックを含む。
2　黒褐色土（10YR2/2）しまり・粘性中。径５cm 以下のロームブロックを含む。

第27図　集石土坑５



第28図　集石土坑５出土遺物

集石土坑５（第 27･28 図、PL.9-2･55-1）

西区 K32 グリッド、標高 68.4 ｍの丘陵肩部に位置する集石土坑である。集石土坑３とは南に 10 ｍ離れた位置関係にある。平面形は長軸 2.6 ｍ、短軸 1.9 ｍの楕円形を呈し、深さは 30㎝である。底面は皿状を呈する。埋土は２層に分層できる。そのうち、主体となる２層には大きめのロームブロックが多く含まれており、人為的に埋め戻された可能性が高いと考える。

礫は底面からやや浮いた状態で５点出土している。いずれも角礫で、石材はデイサイトである。一部の礫に被熱による赤変がみられる。配置に規則性は窺われない。

遺物は埋土から突帯文土器 31、黒曜石製の凹基無茎石鏃Ｓ４が出土した。31 は晩期後半の突帯文土器で口縁端部はわずかに外反し、口縁部外面に刻み目突帯をもつ。濵田編年晩期Ⅴ期からⅥ期併行と考えられる。

よって、遺構の時期は出土遺物から縄文時代晩期後半頃と考えられる。

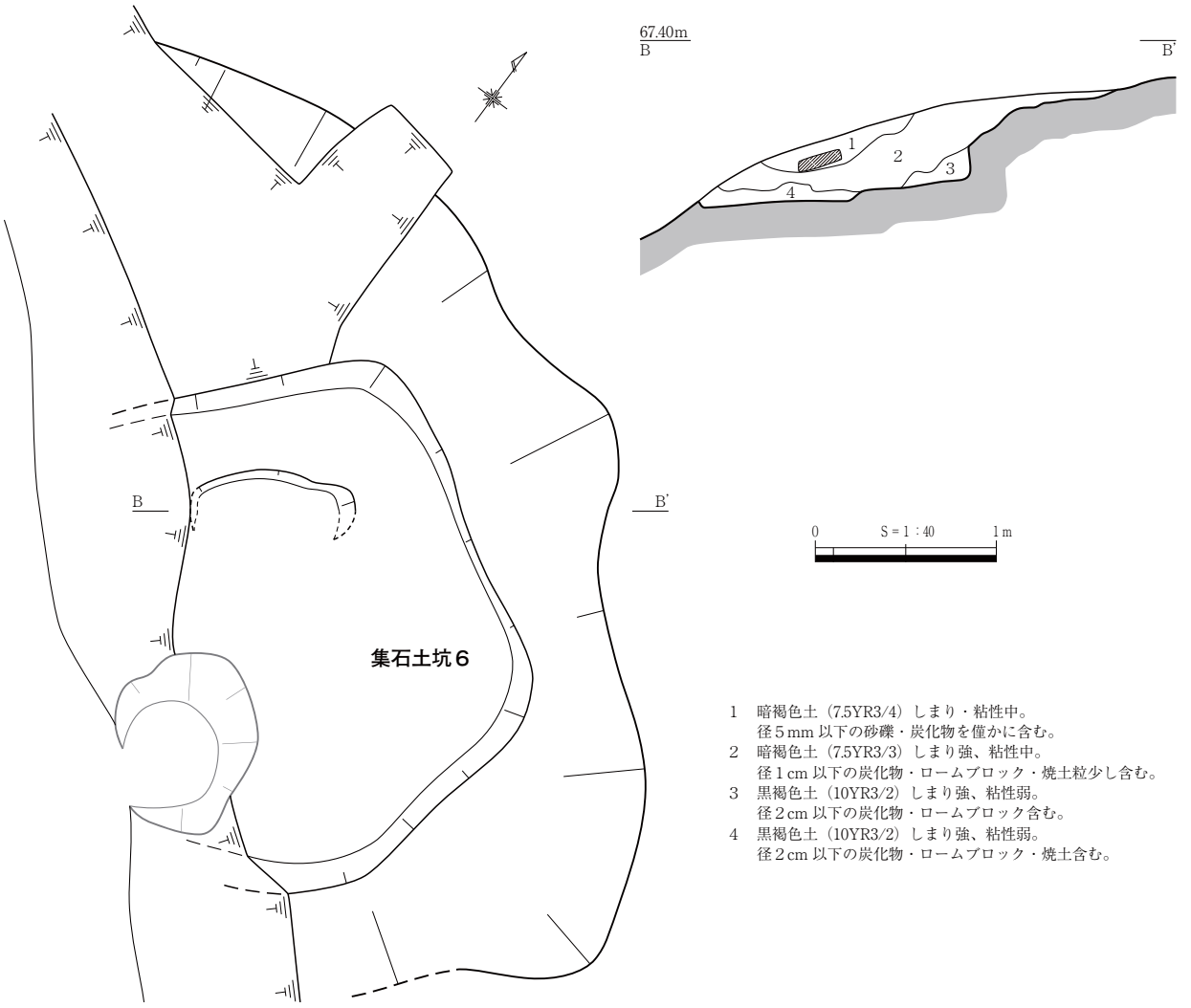
集石土坑６（第 29･30 図、PL.37･55-1）

西区 K32 グリッド、標高 67.1 ｍの丘陵肩部の傾斜変換点に位置する。遺構は西半が後世の農道により大きく削平されており、遺存していない。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 2.8 ｍ、短軸 1.7 ｍと推測され、深さは 40㎝である。埋土は焼土を多く含んでいる。

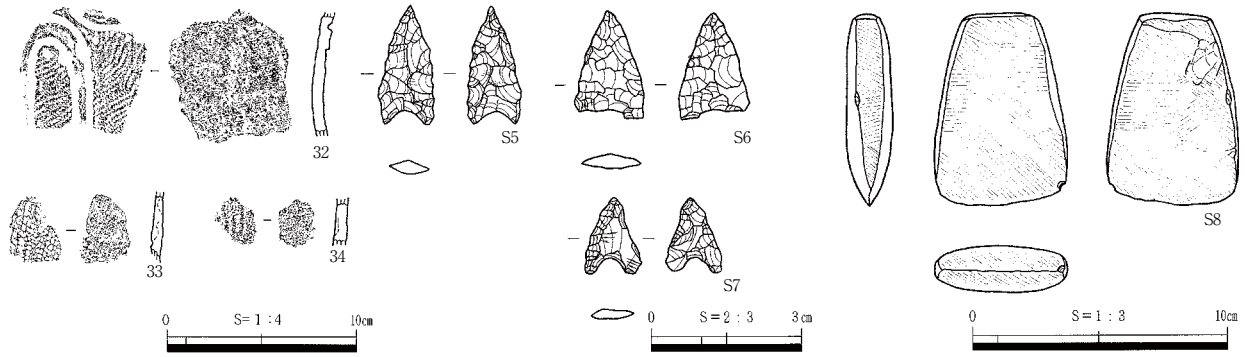
礫は底面から浮いた状態で出土しており、円礫を１点含む他は角礫である。一部の礫に被熱による赤変やハジケが認められる。配置の規則性は窺われない。

遺物は縄文土器と石器が出土している。32 は RL 縄文地に沈線文が施されるもので、北白川Ｃ式併行と考えられる。33・34 は撚糸文が施されるもので、里木Ⅱ式併行と考えられる。石鏃はいずれも黒曜石製の凹基無茎石鏃で、大型で細長のＳ５・６、中型のＳ７がある。Ｓ８は砂岩製の磨製石斧で、混入品である。刃部が片減りしており、縦斧として使用されたものと考えられる。

本遺構の時期は出土遺物から縄文時代中期末葉頃と考えられる。



第29図　集石土坑６



第30図　集石土坑６出土遺物

集石土坑７（第 31･32 図、PL.9-3･37･58-2）

西区Ｋ 35 グリッド、標高 63.6 ｍの斜面に位置する集石土坑である。西区の他の集石土坑とはやや離れた場所に位置する。平面形は長軸 1.8 ｍ、短軸 1.3 ｍのやや歪な楕円形を呈し、深さは 25㎝である。断面形は皿状を呈する。埋土は２層に分層でき、上層の１層には焼土を多く含むが、２層には焼土や炭化物はほとんど含まれない。

礫は埋土上層を中心に出土している。角礫が主体で、石材はいずれもデイサイトである。一部の礫

に被熱による赤変がみられる。配置に規則性は窺われない。

遺物は縄文土器と石器が出土している。35 はしっかりとした平底の破片資料である。Ｓ９は大型の石皿で、使用頻度が高く、上面が大きく窪んでいる。

本遺構の時期は詳細には特定できないが、出土遺物から縄文時代中期から後期と考えられる。

４　落とし穴

落とし穴１（第 33 図、PL.10-1）

東区Ｅ区、G21 グリッド、標高 72.6 ｍの丘陵平坦部に位置する。平面形は長軸 1.0 ｍ、短軸 0.84 ｍの隅丸方形を呈し、深さは 1.38 ｍを測る。底面中央には杭痕跡とみられる径 20㎝､深さ 23㎝の小ピットが確認された。埋土は黒褐色土を主体とする。遺物は出土していない。

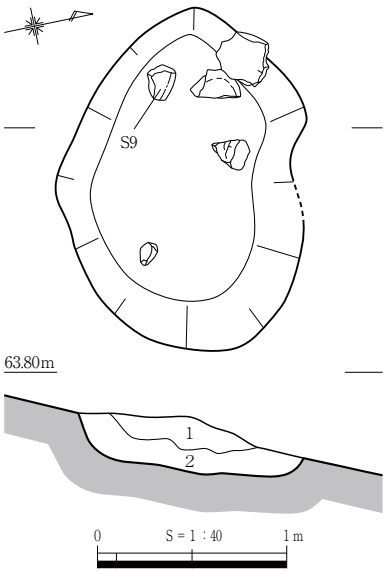
埋土下層の炭化物を放射年代測定したところ、２σ暦年代範囲で 5,389calBC-5,310calBC（65.9%）という結果が得られた。したがって、本遺構の時期は縄文時代早期末頃と考えられる。

落とし穴２（第 34 図、PL10-2）

東区Ｅ区、J21 グリッド、標高 71.9 ｍの丘陵平坦部に位置する。平面形は長軸 1.82 ｍ、短軸 1.22 ｍの長楕円形を呈し、深さは 1.18m を測る。本遺跡で確認された落とし穴の中では最も規模がかなり大きく、形状もやや特異である。底面は比較的平坦で、杭痕跡等は確認されていない。埋土は黒褐色土を主体とし、自然堆積により埋没したと考えられる。遺物は出土せず、詳細な時期は特定できないが、形態や埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。

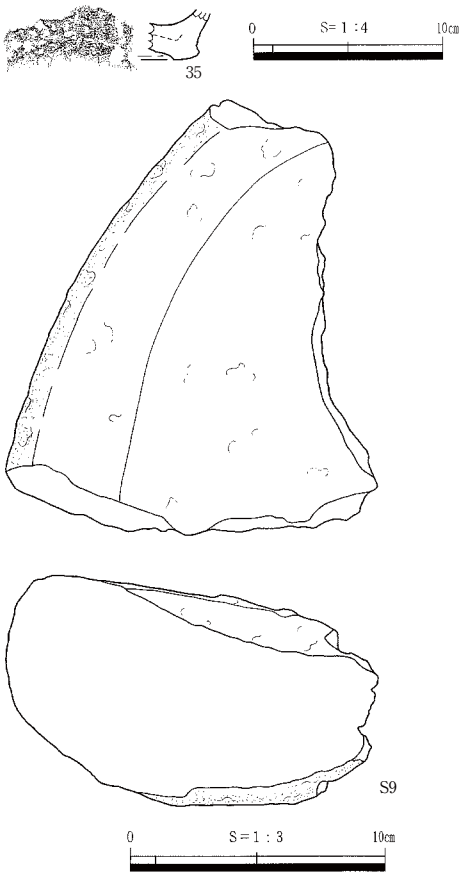
落とし穴３（第 35 図）

東区Ｄ区、H11 グリッド、標高 69.9 ｍの丘陵緩斜面に位置する。検出面はトレンチャーにより削平を受けている。平面形は径 70㎝前後の円形を呈し、深さは 1.2 ｍを測る。底面は平坦で、杭痕跡は確認できない。埋土は黒色土を主体とするが、最下層の３層は地山のロームブロックを多く含み、しまりのある土が堆積している。遺物は出土していない。放射性炭素年代測定では１層出土



1　暗褐色土（7.5YR3/4）しまり中、粘性強。焼土粒含む。
2　黒褐色土（7.5YR2/2）しまり中、粘性強。

第31図　集石土坑７



第32図　集石土坑７出土遺物

の炭化物が２σ暦年代範囲で3,381calBC-3,800calBC（57.1%）、3,971 calBC-3,904calBC（37.7%）という結果が得られた。したがって、本遺構の時期は縄文時代前期中葉から後葉頃と考えられる。

落とし穴４（第36･37図、PL.10-3･57-2）

東区Ｄ区、Ｅ11グリッド、標高69.4ｍの丘陵緩斜面に位置する。奈良から平安時代の道２と重複する位置関係にあり、北側の肩部は道２によって削平されている。平面形は長軸1.0ｍ、短軸0.66ｍのやや長手の隅丸方形を呈し、深さは1.27ｍを測る。底面の中央には杭痕跡とみられる、径18㎝、深さ37㎝の小ピットが確認される。埋土は黒色土を主体とする。６層は地山ローム土が水平堆積しており、人為的に埋め戻された可能性が高い。その場合、杭をもつタイプから杭を持たないタイプの落とし穴へと再利用された可能性が考えられる。

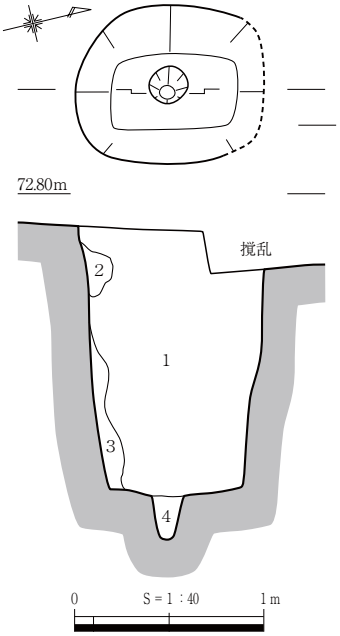
遺物は埋土から大型で、黒曜石製の凹基無茎石鏃Ｓ10が出土している。詳細な時期は特定できないが、形態や埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。

落とし穴５（第38図、PL.10-4）

東区Ｄ区、Ｇ16グリッド、標高71.6ｍの丘陵平坦部に位置する。平面形は長軸1.0ｍ、短軸0.96ｍの円形を呈する。深さは1.26ｍを測る。底面に杭痕跡はみられない。埋土は黒褐色土を主体とする自然堆積と考えられる。遺物は出土せず、詳細な時期は特定できないが、形態や埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。

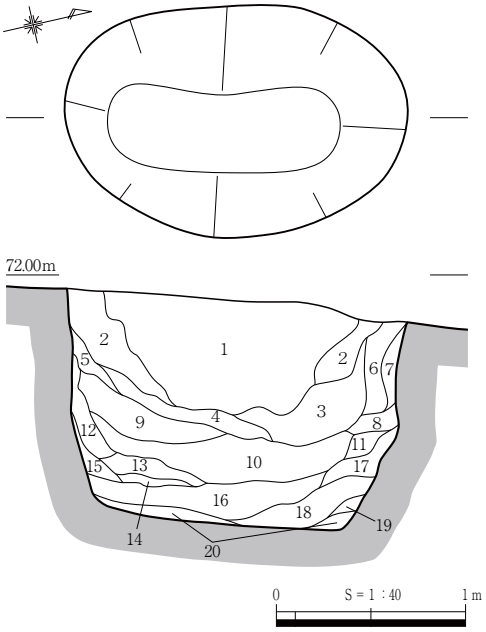
落とし穴６（第39図）

東区Ｄ区、Ｇ16グリッド、標高71.8ｍの丘陵平坦部に位置する。平面形は長軸1.04ｍ、短軸0.8ｍの楕円形を呈する。深さは1.15ｍを測り、壁面はややオーバーハング気味となる。底面に杭痕跡はみ



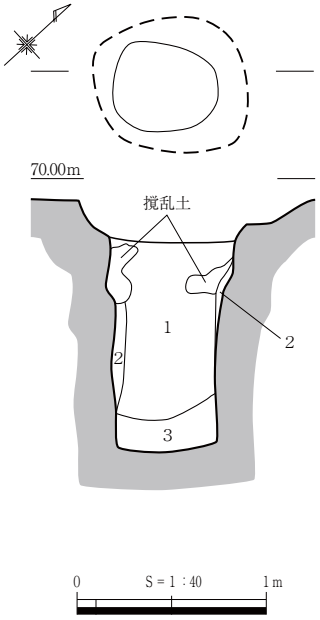
1　黒色土（10YR2/1）しまり普通、粘性やや強。
2　黒褐色土（10YR2/2）しまりやや弱、粘性普通。径0.5～1cmのAT由来土ブロック多く含む。壁面崩落土か。
3　黒褐色土（10YR2/2）しまり普通、粘性やや強。径5mm程のローム粒を含む。
4　褐灰色土（10YR4/1）しまりやや弱、粘性普通。径0.5～1cmの黒色土ブロック、径1～3cmのロームブロック多く含む。

第33図　落とし穴１



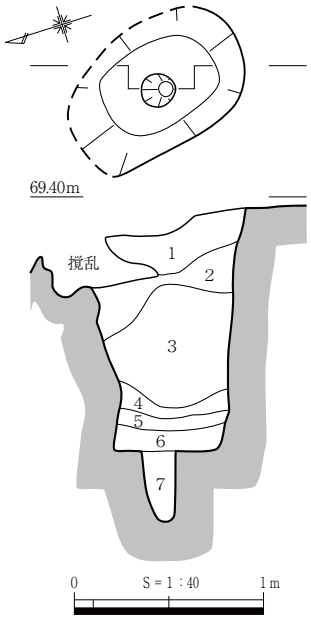
1　黒色土（10YR2/1）しまり・粘性普通。
2　黒褐色土（10YR2/2）しまり・粘性普通。
3　黒褐色土（10YR3/2）しまり・粘性普通。径5mmのAT粒少し含む。
4　灰黄褐色土（10YR4/2）しまり普通、粘性やや強。径5mmのAT粒少し含む。径5cm以上のホワイトロームブロックを多く含む。
5　黒褐色土（10YR3/2）しまり・粘性普通。径5mmのAT粒少し含む。
6　暗褐色土（10YR3/3）しまり強、粘性普通。径0.5～1cmのAT粒少し含む。
7　暗褐色土（10YR3/3）しまり強、粘性普通。径0.5～4cmのATブロック多く含む。
8　黒褐色土（10YR3/2）しまり強、粘性普通。
9　黒褐色土（10YR2/2）しまり・粘性普通。径5mmのAT粒少し含む。
10　黒褐色土（10YR2/3）しまり普通、粘性やや強。径5mmのAT粒少し含む。
11　灰黄褐色土（10YR4/2）しまり・粘性普通。径5mmのAT粒少し含む。
12　褐色土（10YR4/4）しまりやや強、粘性普通。径1～2cmのATブロック少し含む。径2cm以上のホワイトロームブロック多く含む。
13　黒褐色土（10YR2/2）しまり普通、粘性やや強。径5mmのAT粒少し含む。
14　黒褐色土（10YR2/2）しまり普通、粘性やや強。径0.5～1cmのハードローム粒多く含む。
15　褐色土（10YR4/6）しまり普通、粘性やや強。径1cmのAT粒少し含む。径3cm以上のハードロームブロック多く含む。
16　黒褐色土（10YR3/2）しまり普通、粘性やや強。
17　黄褐色土（10YR5/6）しまり普通、粘性やや強。径2cm以上のホワイトロームブロック多く含む。径5mmのAT粒非常に多く含む。
18　黒褐色土（10YR2/2）しまり・粘性やや強。
19　にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまり強、粘性やや強。
20　にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり強、粘性やや強。

第34図　落とし穴２



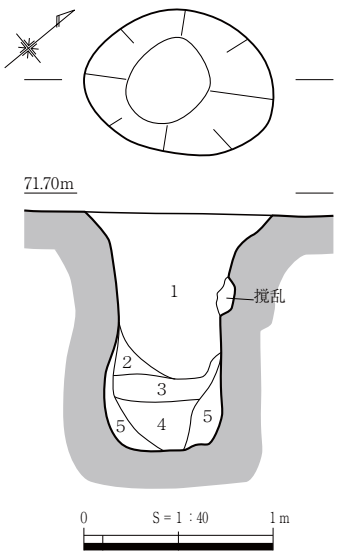
1　黒色土（10YR2/1）しまり強、粘性普通。
　径５mmのATブロック多く含む。
　径１～３cmのロームブロック少し含む。
2　黒褐色土（10YR3/1）しまり・粘性やや強。
　径0.5～１cmのローム粒非常に多く含む。
3　褐色土（10YR4/4）しまりやや強、粘性強。
　径１～２cmのロームブロック非常に多く含む。
　壁面崩落土か。

第35図　落とし穴３



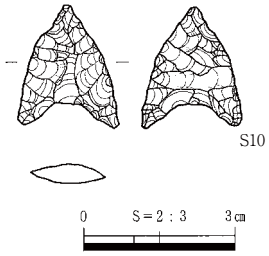
1　黒色土（10YR2/1）しまり・粘性普通。
2　黒色土（10YR2/1）しまりやや弱、粘性普通。
　径５mmのAT粒多く含む。
3　黒色土（10YR2/1）しまりやや弱、粘性普通。
4　にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまり・粘性強。
　径１cmの黒色土ブロック少し含む。
5　黒褐色土（10YR3/1）しまり・粘性弱。
　径0.5～１cmのロームブロック含む
6　橙色土（7.5YR6/6）しまり・粘性強。
　径１cmの黒色土ブロック含む。
7　暗褐色（7.5YR3/3）しまり弱、粘性やや強。
　黒色土（7.5YR2/1）と橙色（7.5YR6/8）
　ローム（ハードローム）の混土。
　ロームは径５mmのブロック状。

第36図　落とし穴４



1　黒褐色土（10YR2/2）しまりやや強、粘性普通。
　径0.5～１cmのAT粒多く含む。
2　暗褐色土（10YR3/4）しまり・粘性普通。
3　黒褐色土（10YR2/2）しまり・粘性普通。
4　黒褐色土（10YR3/2）しまり・粘性やや強。
　径２cm程のロームブロック少し含む。
5　暗褐色土（10YR3/3）しまり・粘性やや強。
　径１～２cmのロームブロック多く含む。

第38図　落とし穴５



第37図　落とし穴４出土遺物

られない。埋土は黒褐色土を主体とする自然堆積である。遺物は出土せず、詳細な時期は特定できないが、形態や埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。

落とし穴７（第40図、PL.10-5,6）

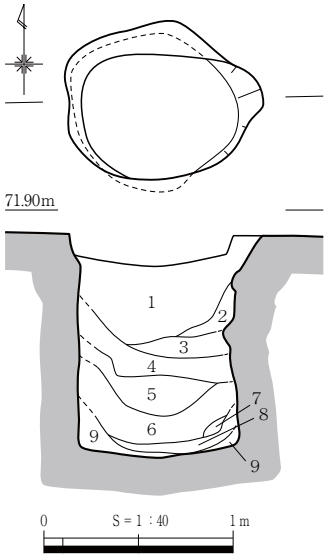
東区Ｄ区、Ｈ16グリッド、標高71.9ｍの丘陵平坦部に位置する。平面形は径0.9ｍの円形を呈し、深さは1.07ｍを測る。底面の中央には杭痕跡と考えられる、径22㎝、深さ20㎝の小ピットがある。埋土は黒色土を主体とする。遺物は出土せず、詳細な時期は特定できないが、形態や埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。

落とし穴８（第41図）

東区Ｄ区、Ｉ15グリッド、標高71.8ｍの丘陵平坦部に位置する。平面形は径0.9ｍの円形を呈し、深さは1.05ｍを測る。底面は平坦で、杭痕跡等は確認されていない。埋土は黒色系の土を主体とする。遺物は出土しておらず、詳細な時期は特定できないが、形態や埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。

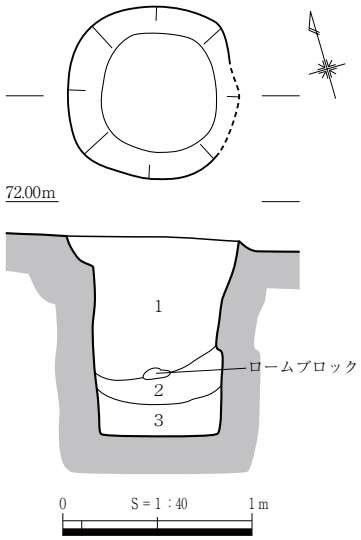
落とし穴９（第42図、PL.11-1,2）

東区Ｄ区、Ｉ18グリッド、標高72.3ｍの丘陵平坦部に位置する。平面形は径1.0ｍの円形を呈し、深さは0.94ｍを測る。底面に杭痕跡は確認されていない。埋土は黒色土を主体とする。遺物は出土せず、



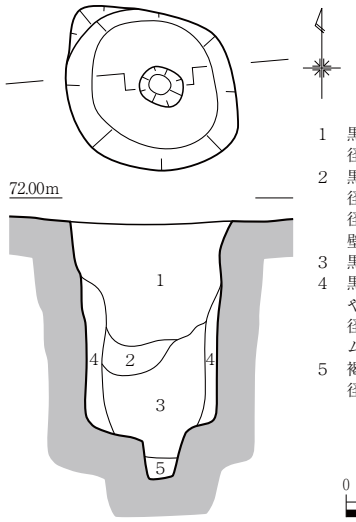
1　黒褐色土（10YR2/2）しまり普通、粘性やや弱。
　径５mm 程のローム粒非常に多く含む。
2　暗褐色土（10YR3/3）しまり・粘性普通。
　径５mm 程の AT 粒多く含む。
3　黒褐色土（10YR2/2）しまり・粘性普通。
　径５mm 程のローム粒少し含む。
4　黒褐色土（10YR2/3）しまり・粘性普通。
　径３～４cm のホワイトロームブロック、
　径１cm 以下のローム粒少し含む。
5　黒褐色土（10YR2/2）しまり・粘性普通。
　径５mm 程のローム粒少し含む。
6　暗褐色土（10YR3/4）しまり・粘性普通。
　径３cm 以下のハードロームブロック多く含む
7　褐色土（7.5YR4/3）しまり・粘性強。
　径１～３cm のパミスブロック多く含む。
　ローム主体。壁面崩落土か。
8　黒褐色土（10YR3/2）しまり・粘性普通。
　径１～３cm のパミス・AT・ロームブロック含む
9　褐色土（7.5YR4/4）しまり・粘性強。
　径１～３cm のパミス・AT・ロームブロック多く
　含む。径１cm の暗褐色土ブロック含む。
　ローム主体。壁面崩落土か。

第39図　落とし穴６



1　黒色土（10YR1.7/1）しまり・粘性普通。
　径 0.5 ～３cm のロームブロック少し含む。
2　黒褐色土（10YR2/2）しまり普通、粘性やや強。
　径 0.5 ～１cm のローム粒多く含む。
3　褐色土（10YR4/4）地山ブロック・黒色土ブロック混在土。

第41図　落とし穴８



1　黒色土（10YR2/1）しまり・粘性やや弱。
　径５mm 程のローム粒少し含む。
2　黒褐色土（10YR2/2）しまり・粘性普通。
　径 10cm の AT ブロック含む。
　径５cm 以下の AT ブロック多く含む。
　壁体崩落土と黒色土の混合土。
3　黒色土（10YR2/1）１層に酷似。
4　黒色土（10YR2/1）しまりやや弱、粘性や
　や強。径５㎜のローム粒多く含む。
　径３～５cm のホワイトローム・ハードロー
　ムブロック多く含む。
5　褐色土（10YR4/4）しまり普通、粘性やや強。
　径 0.5 ～１cm の褐色土ブロック含む。

第40図　落とし穴７

詳細な時期は特定できないが、形態や埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。

落とし穴 10（第 43 図）

東区Ｇ区、Ｇ９グリッド、標高 67.0 ｍの緩斜面に位置する。弥生時代後期の竪穴建物３に切られており、竪穴建物３の床面レベルで検出した遺構である。平面形は径 0.8 ｍの円形を呈し、深さは現状で 0.7 ｍを測る。底面に杭痕跡はみられない。埋土は黒色土と褐色土からなる。遺物は出土せず、詳細な時期は特定できないが、形態や埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。

落とし穴 11（第 44 図、PL.11-3）

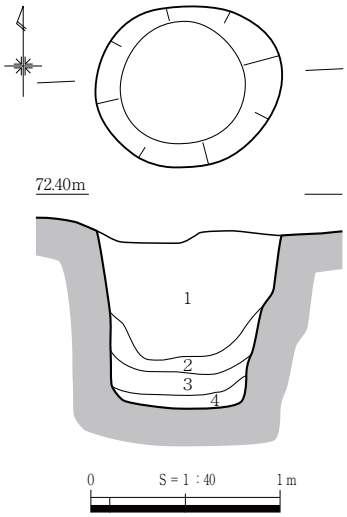
西区Ｋ 30 グリッド、標高 69.4 ｍの丘陵平坦部に位置する。平面形は長軸 1.25 ｍ、短軸 0.9 ｍの楕円形を呈し、深さは 1.2 ｍである。底面の中央に杭痕跡とみられる、径 14㎝、深さ 33㎝のピットが伴う。埋土は暗褐色系の土を主体とする。遺物は図化しえなかったが、埋土から縄文土器片が出土している。詳細な時期は特定できないが、出土遺物から縄文時代の落とし穴と考えられる。

落とし穴 12（第 45 図、PL.11-4）

西区Ｊ 33 グリッド、標高 66.7 ｍの丘陵肩部の傾斜変換点に位置する。平面形は長軸 1.2 ｍ、短軸 0.6 ｍの隅丸方形を呈し、深さは 0.9 ｍである。底面の中央に杭痕跡とみられる、径 14㎝、深さ 54㎝のピットが伴う。埋土は暗褐色系の土を主体とする。遺物は出土していない。詳細な時期は特定できないが、形態や埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。

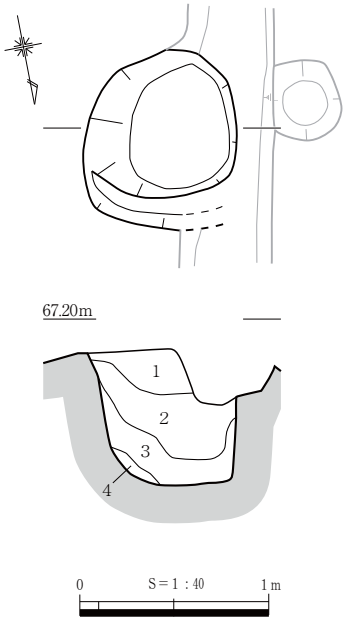
落とし穴 13（第 46 図、PL.11-5,6）

西Ｉ 33 グリッド、標高 67.6 ｍの丘陵平坦部に位置する。平面形は径 0.8 ｍの円形を呈し、深さは



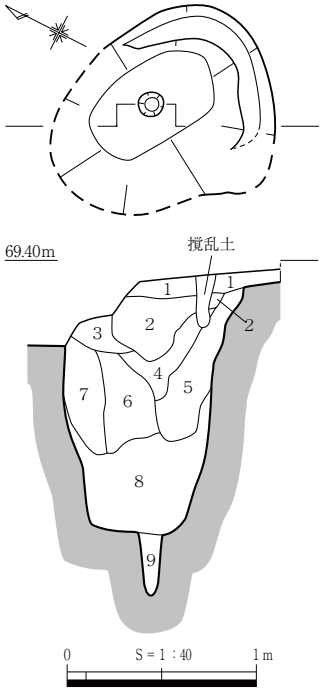
1　黒色土（10YR2/1）しまり・粘性普通。
　　径１cm 以下のローム粒多く含む。
2　黒褐色土（10YR2/3）しまり普通、粘性やや強。
　　径１cm 以下のローム粒多く含む。
3　黒色土（10YR2/1）しまり・粘性やや強。
　　径１cm 以下のローム粒少し含む。
4　灰黄褐色土（10YR4/2）しまり・粘性普通。
　　径５mm 程のローム粒少し含む。

第42図　落とし穴９



1　黒色土（10YR2/2）
2　褐色土（10YR4/6）
3　褐色土（10YR4/4）
4　黄褐色土（10YR5/6）ローム土主体。

第43図　落とし穴10



1　にぶい赤褐色土（5YR5/4）
2　にぶい赤褐色土（5YR4/4）
　　ロームブロック少し含む。炭化物を含む。
3　にぶい赤褐色土（5YR4/4）炭化物を少し含む。
4　暗赤褐色土（5YR3/2）
　　ロームブロック・炭化物含む。
5　暗赤褐色土（5YR3/2）やや粘質。
6　暗赤褐色土（5YR3/2）やや粘質。
　　ロームブロック含む。
7　暗赤褐色土（5YR3/2）やや粘質。
8　暗赤褐色粘質土（5YR3/2）
　　ロームブロック含む。
9　黒褐色土（10YR2/3）しまり・粘性弱。
　　径２cm 以下のローム粒多く含む。

第44図　落とし穴11

1.6 mである。底面の中央に杭痕跡とみられる、径 20cm、深さ 31 cmのピットが伴う。埋土は暗褐色系の土を主体とする。レンズ状の堆積を示しており、自然に埋没した様子が窺える。遺物は出土していない。詳細な時期は特定できないが、形態や埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。

落とし穴 14（第 47 図、巻頭図版 1-2･PL.13-6）

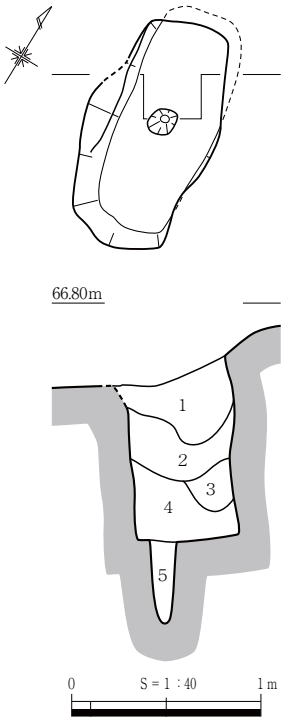
西区Ｈ 31 グリッド、標高 69.4 mの丘陵平坦部に位置する。平面形は長軸 1.8 m、短軸 1.2 mの隅丸方形を呈し、深さは 1.5 mである。底面の中央付近に杭痕跡とみられる、径 20cm、深さ 35cmのピットが伴う。

本遺構では土層を詳細に観察するため、半裁段階で遺構の掘方半分を破壊し掘り下げる断ち割り調査を行っている（巻頭図版 1-2)。この調査により、まず、本遺構がクロボク堆積を切って掘り込まれていることを確認した。埋土は基本的に黒褐色系の土を主体とし、上層に暗褐色土が落ち込んでいる。また、底面ピットの埋土は概ねしまりが悪いローム土主体で、色調から上下層（10・11 層）に分層したが、実際は断面の中央に縦方向に延びる堅く締まる土が認められた。この堅く締まる部分の幅は５～６cmで、杭を固定するための裏込め土である可能性が考えられる。したがって、この堅く締まる土を挟んだ両側に杭が設けられた可能性が高く、ピット１基内に少なくとも２本以上の杭が設置されていたと考えられる。

遺物は埋土から縄文土器片と黒曜石の剥片が出土したが、いずれも細片のため図化しえない。よって、詳細な時期は明らかではないが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

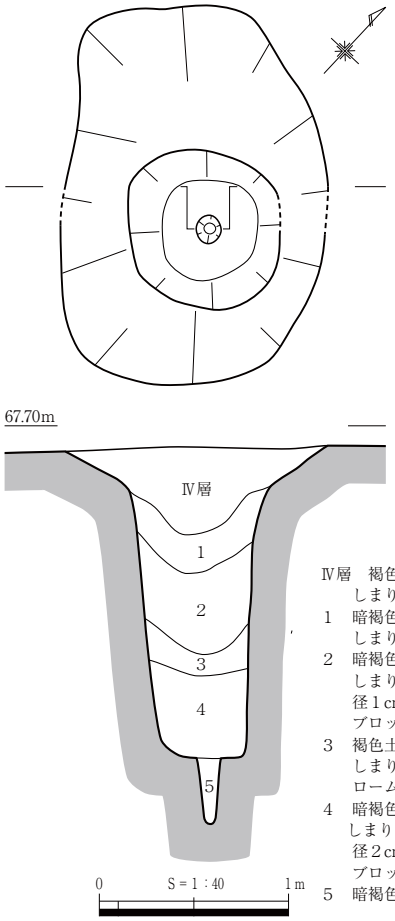
落とし穴 15（第 48 図、PL.12-1）

西区Ｊ 30 グリッド、標高 69.9 mの丘陵平坦部に位置する。平面形は長軸 1.5 m、短軸 0.9 mの楕円形を呈し、深さは 1.1 mである。底面の中央に杭痕跡とみられる、径 20cm、深さ 32cmのピットが伴う。



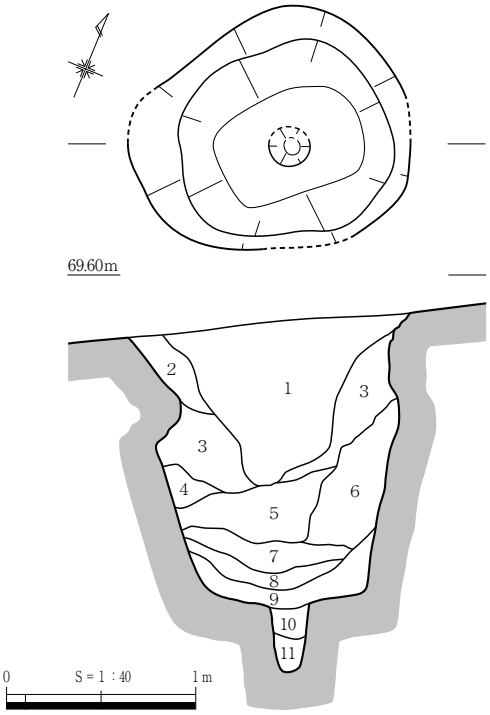
1　暗褐色土（7.5YR3/3）
　しまりやや弱、粘性やや強。
　径１cm 以下の AT ブロック含む。
2　黒褐色土（7.5YR3/2）
　しまりやや弱、粘性やや強。
　径２cm 以下のロームブロック含む。
3　黒褐色土（7.5YR3/2）
　しまりやや弱、粘性やや強。
4　褐色（10YR4/4）
　しまりやや強、粘性強。
　ロームブロック主体。
5　褐色土（10YR4/4）
　しまり弱、粘性強。
　径３cm 以下の黄褐色ローム
　ブロック多く含む。

第45図　落とし穴12



Ⅳ層　褐色土（7.5YR4/3）
　しまりやや強、粘性弱。
1　暗褐色土（7.5YR3/3）
　しまり弱、粘性やや強。
2　暗褐色土（7.5YR3/4）
　しまり弱、粘性やや強。
　径１cm 以下のローム
　ブロック多く含む。
3　褐色土（7.5YR4/3）
　しまり弱、粘性強。
　ロームブロックとの混土。
4　暗褐色土（7.5YR3/3）
　しまり弱、粘性強。
　径２cm 以下のローム
　ブロック多く含む。
5　暗褐色土（7.5YR3/3）

第46図　落とし穴13



1　褐色土（7.5YR4/4）しまり中、粘性強。
　径３cm 以下の AT ブロック少し含む。
2　黒褐色土（7.5YR2/2）しまり・粘性やや強。
3　黒褐色土（10YR2/2）しまり中、粘性やや強。AT ブロック多く含む。
4　暗褐色土（10YR3/4）しまり・粘性やや強。AT ブロック多く含む。
5　暗褐色土（7.5YR3/4）しまり弱、粘性やや強。
　径２cm 以下の AT ブロック少し含む。
6　黒褐色土（10YR2/2）しまり・粘性やや強。
　径５cm 以下の AT ブロック・橙色土ブロック・炭化物含む。
7　暗褐色土（7.5YR3/4）しまり弱、粘性やや強。橙色土ブロック多く含む。
8　暗褐色土（7.5YR3/3）しまり弱、粘性やや強。橙色土ブロック多く含む。
9　暗褐色土（7.5YR2/3）しまり弱、粘性やや強。
10　暗褐色土（7.5YR3/3）しまり弱、粘性やや強。黄褐色土粒多く含む。
11　褐色土（7.5YR4/6）しまり弱、粘性やや強。

第47図　落とし穴14

埋土は黒褐色系の土を主体とする。遺物は出土していない。詳細な時期は特定できないが、形態や埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。

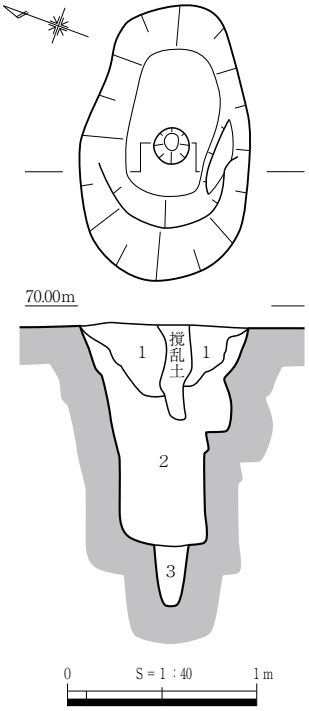
落とし穴 16（第 49･50 図、PL.12-2･37）

西区Ｈ 33 グリッド、標高 67.5 ｍの丘陵平坦部に位置する。平面形は長軸 1.2 ｍ、短軸 0.8 ｍの楕円形を呈し、深さは 0.7 ｍである。底面の中央に杭痕跡とみられる、径 15㎝、深さ 37㎝のピットが伴う。埋土は３層に分層でき、黒褐色系の土を主体とする。遺物は１・２層から縄文土器が出土している。36 は口縁部内外面に斜縄文を、外面の突帯にＣ形の押引文を施す。大歳山式併行期のものと考えられる。

本遺構の時期は出土土器から縄文時代前期末から中期初頭と考えられる。

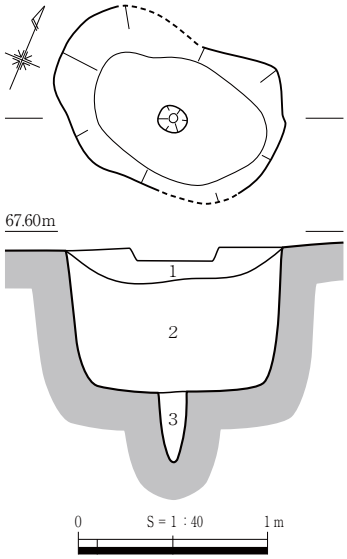
落とし穴 17（第 51 図、PL.12-3）

西区Ｊ 29 グリッド、標高 69.9 ｍの丘陵平坦部に位置する。平面形は長軸 1.9 ｍ、短軸 1.0 ｍの楕円形を呈し、深さは 1.5 ｍである。断面形は開口部が広く、



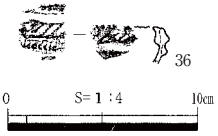
1　暗褐色土（7.5YR3/4）しまり強、粘性中。
　　径２cm 以下のロームブロック僅かに含む。
2　黒色土（10YR1.7/1）しまり強、粘性中。
　　径２cm 以下のロームブロック僅かに含む。
3　黒色土（10YR2/1）しまり弱、粘性強。
　　径１cm 以下の黄褐色ローム粒多く含む。

第48図　落とし穴15

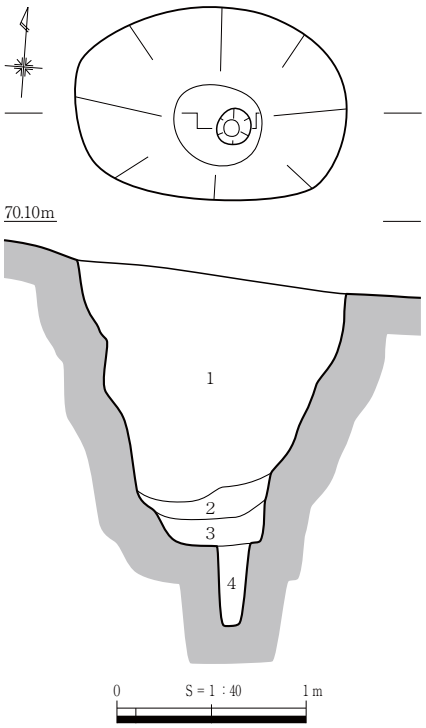


1　暗褐色土（10YR3/4）しまり・粘性弱。
2　黒色土（10YR1.7/1）しまり・粘性弱。
　　径１cm 以下のロームブロック僅かに含む。
3　黒褐色土（10YR2/2）しまり弱、粘性強。
　　径１cm 以下の橙色・黄褐色ロームブロック多く含む。

第49図　落とし穴16



第50図　落とし穴16出土遺物



1　褐色土（10YR4/4）しまり・粘性強。
2　暗褐色土（10YR3/3）しまり・粘性強。
　　径３cm 以下の橙色ロームブロック多く含む。
3　黒褐色土（10YR2/2）しまり・粘性強。
　　径２cm 以下の橙色ロームブロック多く含む。
4　褐色土（7.5YR4/6）しまり弱、粘性強。
　　径１cm 以下の橙色ロームブロック多く含む。

第51図　落とし穴17

底部にかけて窄まる擂り鉢状となる。底面は径0.5mの円形を呈する。底部の中央に杭痕跡とみられる、径 14㎝、深さ 40㎝のピットが伴う。埋土は褐色系の土を主体とする。

遺物は出土していないが、底面ピットの埋土（４層）から出土した炭化物１点について放射性炭素年代測定したところ、２σ暦年代範囲で 4,710calBC- 4,550calBC（95.4％）という結果が得られた。

したがって、本遺構の時期は縄文時代前期前葉と考えられる。

落とし穴 18（第 52 図、PL.12-4）

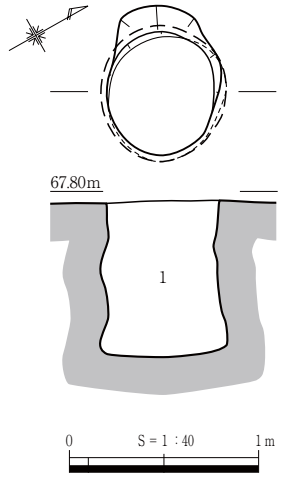
西区 J32 グリッド、標高 67.7 mの丘陵平坦部に位置する。平面形は径 0.6 mの円形を呈し、深さは 0.7 mである。底面にピットは伴わない。埋土は黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。詳細な時期は定かではないが、形態や埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。

落とし穴 19（第 53 図、PL.12-5）

西区Ｉ 35 グリッド、標高 66.4 mの丘陵肩部の傾斜変換点付近に位置する。北２mに落とし穴 20 が、南東２mに落とし穴 25 が隣接する。平面形は長軸 1.1 m、短軸 0.7 mの隅丸方形を呈し、深さは 0.9 mである。底面の中央に杭痕跡とみられる、径 15㎝、深さ 34㎝のピットが伴う。埋土は暗褐色土と黒褐色土を主体とする。遺物は出土していない。詳細な時期は特定できないが、形態や埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。

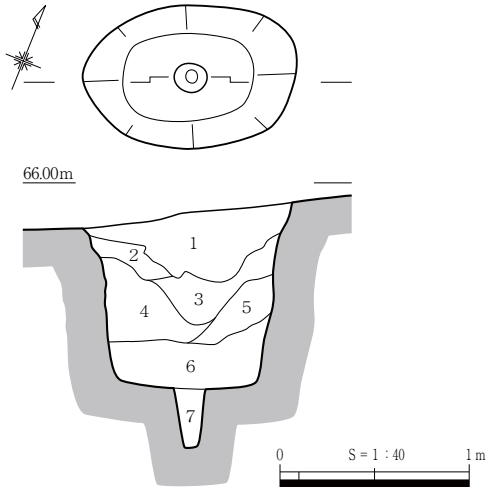
落とし穴 20（第 54 図、PL.12-6）

西区Ｈ 35 グリッド、標高 66.0 mの丘陵肩部の傾斜変換点付近に位置する落とし穴である。落とし穴 19、25 が隣接する。平面形は長軸 0.9 m、短軸 0.6 mの隅丸方形を呈し、深さ 1.3 mである。底面



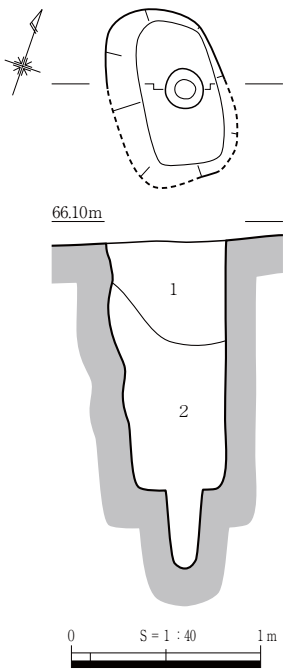
1　黒褐色土（10YR1.7/1）しまり中、粘性強。
　径３cm 以下のロームブロック僅かに含む。

第52図　落とし穴18



1　暗褐色土（10YR3/3）しまり中、粘性強。
　径３cm 以下の炭化物多く含む。
2　暗褐色土（10YR3/3）しまり弱、粘性強。
3　黒褐色土（10YR3/2）しまり弱、粘性強。
　径１cm 以下のロームブロック僅かに含む。
4　黒褐色土（10YR2/2）しまり弱、粘性強。
　径３cm 以下のロームブロック僅かに含む。
5　黒褐色土（10YR3/3）しまり弱、粘性強。
　径１cm 以下のロームブロック僅かに含む。
6　暗褐色土（10YR3/4）しまり弱、粘性強。
　径 10cm 以下のロームブロック含む。
7　にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり弱、粘性強。
　橙色ロームブロック多く含む。

第53図　落とし穴19



1　褐色土（10YR4/4）しまり・粘性中。
　径３cm 以下のロームブロックわずかに含む
2　暗褐色土（7.5YR3/4）しまり・粘性中。
　橙色ロームブロック多く含む。

第54図　落とし穴20

の中央に杭痕跡とみられる、径 20cm、深さ 38cmのピットが伴う。埋土は暗褐色土を主体とする。遺物は出土していない。詳細な時期は明らかにしえないが、形態や埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。

落とし穴 21（第 55 図、PL.13-1）

西区Ｉ 34、Ｊ 34 グリッド、標高 66.6 ｍの丘陵肩部の傾斜変換点付近に位置する。平面形は長径 1.2 ｍ、短径 0.9 ｍの楕円形を呈し、深さは 0.6 ｍである。底面の中央に杭痕跡とみられる、径 10cm、深さ 10 cmのピットが伴う。埋土は暗褐色土である。

遺物は出土していないが、埋土下層から出土した炭化物１点について放射性炭素年代測定したところ、２σ暦年代範囲で 3,378calBC- 3,328calBC（55.5％）という結果が得られた。したがって、本遺構の時期は縄文時代中期初頭と考えられる。

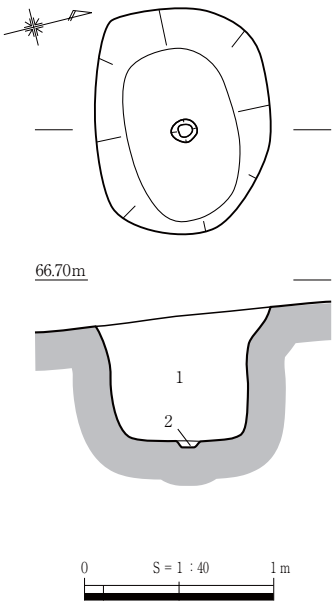
落とし穴 22（第 56 図、PL.13-2）

西区Ｈ 34 グリッド、標高 67.1 ｍの丘陵平坦部に位置する。平面形は長軸 1.2 ｍ、短軸 0.7 ｍの隅丸方形を呈し、深さは 0.9 ｍである。底面の中央に杭痕跡とみられる、径 15cm、深さ 32cmのピットが伴う。埋土は黒褐色土を主体とする。遺物は出土していない。詳細な時期は特定できないが、形態や埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。

落とし穴 23（第 57 図、PL.13-3）

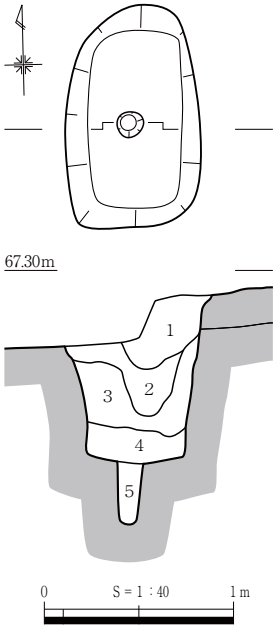
西区Ｉ 31 グリッド、標高 68.2 ｍの丘陵平坦部に位置する。平面形は径 0.6m の円形を呈し、深さは 0.8m である。底面の中央に杭痕跡とみられる径 10cm、深さ８cmのピットが伴う。埋土は黒褐色土の単層である。

遺物は出土していないが、埋土下層から出土した炭化物１点について放射性炭素年代測定を行った



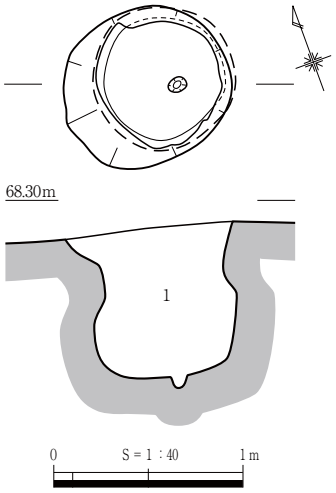
1　暗褐色土（10YR3/4）しまり中、粘性強。
　径３cm 以下のロームブロック少し含む。
　径２cm 以下の炭化物僅かに含む。
2　にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり中、粘性強。
　橙色ロームブロックを多く含む。

第55図　落とし穴21



1　暗褐色土（10YR3/4）しまり・粘性強。
2　黒褐色土（10YR2/3）しまり・粘性中。
3　黒褐色土（10YR2/2）しまり・粘性中。
　径５mm 以下のローム粒多く含む。
4　黒褐色土（10YR3/2）しまり・粘性中。
　径５cm 以下のローム粒多く含む。
5　黒褐色土（7.5YR3/2）しまり弱、粘性強。
　径３mm 以下の橙色土粒多く含む。

第56図　落とし穴22



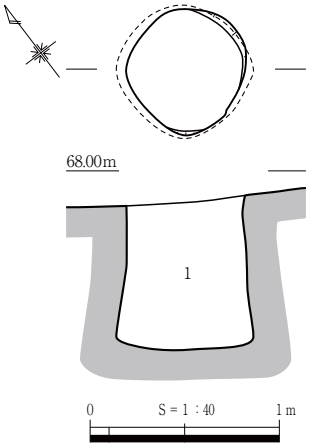
1　黒褐色土（10YR1.7/1）しまり弱、粘性強。
　径１cm 以下の黄褐色ロームブロック少し含む。

第57図　落とし穴23

ところ、２σ暦年代範囲 4,347calBC-4251calBC（94.5％）という結果が得られた。したがって、本遺構の時期は縄文時代前期前葉から中葉頃と考えられる。

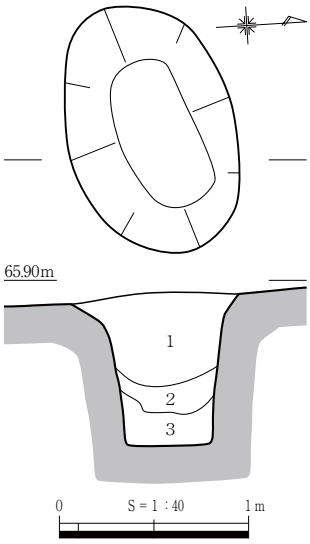
落とし穴 24（第 58 図、PL.13-4）

西区Ｉ 31 グリッド、標高 67.9 ｍの丘陵平坦部に位置する。北東２ｍに落とし穴 23 が位置する。平面形は径 0.7 ｍの円形を呈し、深さは 0.8 ｍである。断面形はやや袋状を呈する。底面にピットは伴わない。埋土は黒色土の単層である。遺物は出土してないが、形態や埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。



1　黒色土（10YR2/1）しまり・粘性強。
　径２cm 以下のロームブロック僅かに含む。

第58図　落とし穴24



1　暗褐色土（7.5YR3/3）しまり・粘性強。
　径３cm 以下のロームブロック斑に多く含む。
2　黒褐色土（7.5YR2/2）しまり中、粘性強。
3　褐色土（7.5YR4/4）しまり弱、粘性強。
　径２cm 以下の黄褐色・橙色ロームブロック多く含む。

第59図　落とし穴25

落とし穴 25（第 59 図、PL.13-5）

西区Ｉ 35 グリッド、標高 65.8 ｍの丘陵肩部の傾斜変換点付近に位置する。落とし穴 19、20 が隣接する。平面形は長径 1.4 ｍ、短径 0.9 ｍの楕円形を呈し、深さは 0.8 ｍである。底面の平面形は隅丸方形で、埋土の最下層である３層に壁面の崩落に由来すると考えられるロームブロック土が多量に含まれていることから、本来の平面形は隅丸方形であった可能性がある。底面にピットは伴わない。埋土は褐色系の土を主体とする。

遺物は出土せず、詳細な時期は特定できないが、形態や埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。

５　その他の土坑

土坑１（第 60･61 図、PL.37･55-1）

西区 J31 グリッド、標高 68.8 ｍの丘陵平坦部に位置する。平面形は長軸 1.1 ｍ、短軸 0.8 ｍの隅丸方形を呈し、深さは 0.6 ｍを測る。底面は平坦である。埋土は周辺の地山由来と考えられるロームブロックが下層から上層まで堆積する。

遺物は埋土から縄文土器深鉢片 37、石鏃が２点（Ｓ 11･12）出土している。36 は風化が著しいが、内面ナデ、外面は縦位に縄文を施文するもので、里木Ⅱ式併行と考えられる。石鏃はいずれも黒曜石製の凹基無茎石鏃で、Ｓ 11 は大型である。

本遺構の時期は出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。性格は平面形が方形で底部が平坦であること、人為的な埋め戻しによる可能性があることなどから、墓壙の可能性がある。

土坑２（第 62 図）

西区 J32 グリッド、標高 67.5 ｍの丘陵肩部に位置する。平面形は楕円形と考えられるが西半を撹乱により破壊されているため、正確ではない。深さは 0.2 ｍで、底面は平坦である。埋土は２層に分層でき、下層の２層中には地山由来のロームブロックを多量に含んでいる。遺物は縄文土器の小片と黒曜石製の剥片が出土したが、いずれも細片で図化しえない。

遺構の性格は不明ながら、埋土が土坑１に類似することから墓壙の可能性もある。

土坑３（第 63･64 図、PL.55-1）

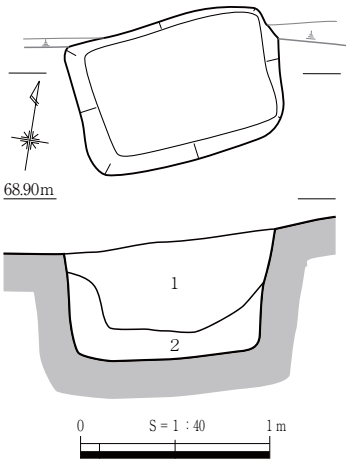
西区 I34 グリッド、標高 66.5 ｍの丘陵肩部に位置する。南半を撹乱によって破壊され、遺存状態が悪い。平面形は現状で長径 1.2 ｍ、短径 0.6 ｍの歪な楕円形を呈し、深さは 0.2 ｍである。埋土は暗褐色土の単層である。遺物は埋土から縄文土器と石器が出土している。S13 は黒曜石調整体である。詳細な時期や性格は明らかではない。

土坑４（第 65･66 図、PL.37）

西区Ｉ 34、Ｊ 34 グリッド、標高 66.7 ｍの丘陵肩部の傾斜変換点付近に位置する。北半を撹乱によって破壊され、遺存状態が悪い。平面形は長軸 1.5 ｍ以上、短軸１ｍの隅丸方形を呈する。断面形は皿状である。埋土は単層で、地山由来のロームブロックを多量に含んでおり、人為的な埋め戻しの可能性が考えられる。

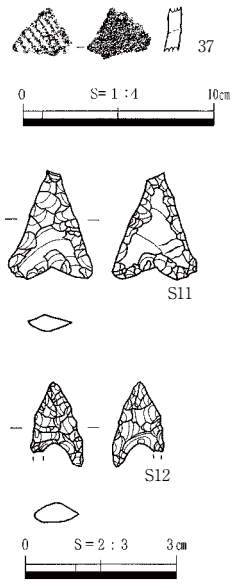
遺物は埋土から縄文土器がまとまって出土した。38 ～ 40 は突帯文土器で、完形に復原できるものは無い。一条の突帯が口縁端部に接する濵田編年晩期Ⅵ期（古海式）併行と考えられる。

本遺構の時期は出土土器から縄文時代晩期末葉と考えられる。遺構の性格は不明である。

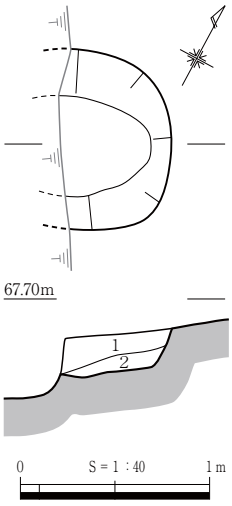


1　褐色土（7.5YR4/3）ロームブロック含む。
2　褐色土（7.5YR4/4）やや粘質。
　　ローム粒少し含む。

第60図　土坑１

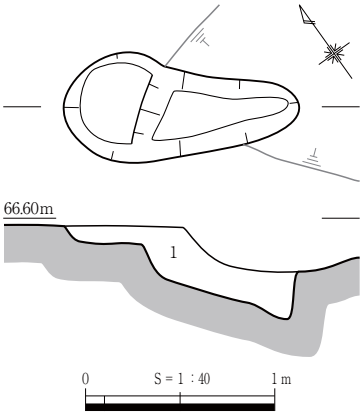


第61図　土坑１出土遺物



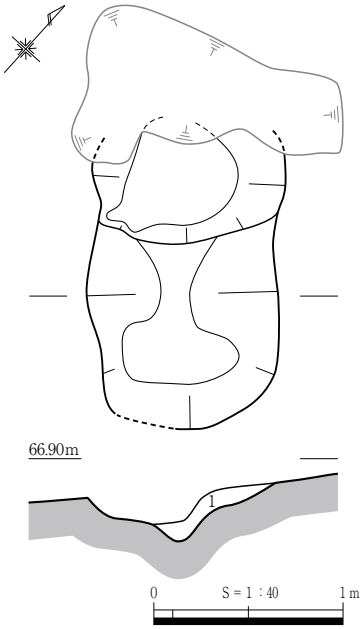
1　暗褐色土（7.5YR3/3）しまり弱、粘性強。
　径２cm 以下のロームブロック少し含む。
　炭化物僅かに含む。
2　褐色土（7.5YR4/6）しまり弱、粘性中。
　径２cm 以下のロームブロック多く含む。

第62図　土坑２



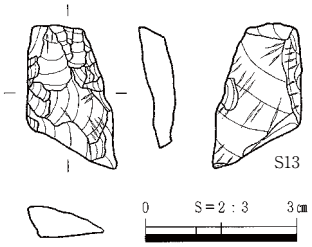
1　暗褐色土（7.5YR3/4）しまり中、粘性強。
　炭化物少し含む。

第63図　土坑３

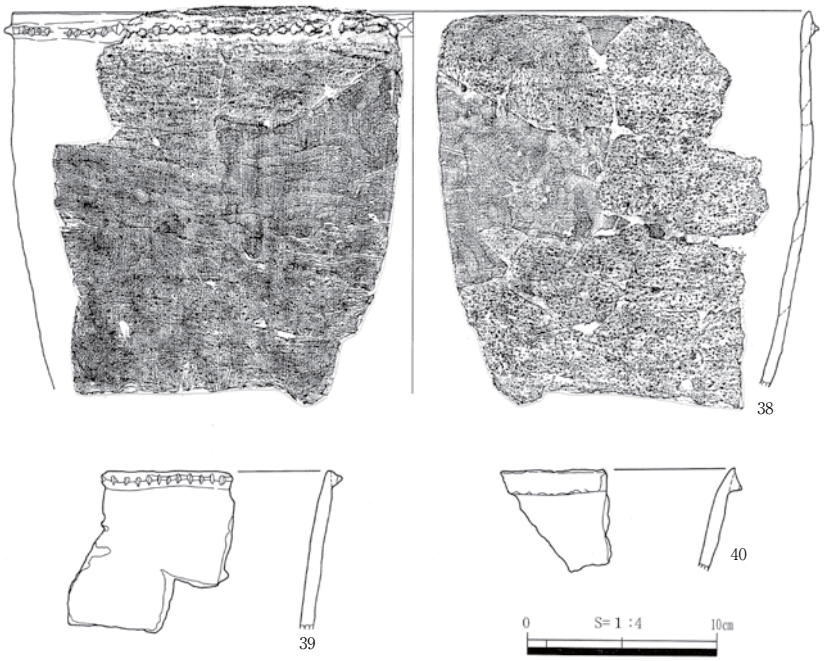


1　褐色土（7.5YR2/3）しまり弱・粘性強。
　径１cm 以下の橙色・黄褐色ロームブロック多く含む。

第65図　土坑４



第64図　土坑３出土遺物



第66図　土坑４出土遺物

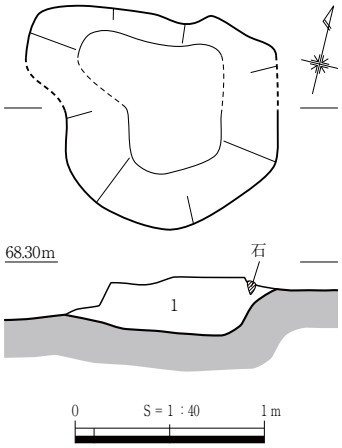
土坑５（第 67 図）

西区Ｊ 32 グリッド、標高 68.2 mの丘陵平坦部に位置する。平面形は長軸 1.5 m、短径 1.2 mの歪な楕円形を呈する。深さは 0.3 mである。底面形は皿状を呈する。埋土は褐色土の単層である。遺物は埋土から縄文土器が出土している。細片のため図化しえなかったが、縄文時代晩期後半の突帯文土器で、一条の突帯が口縁端部に接する古海式である。

本遺構の時期は出土土器から縄文時代晩期後半と考えられる。遺構の性格は不明である。

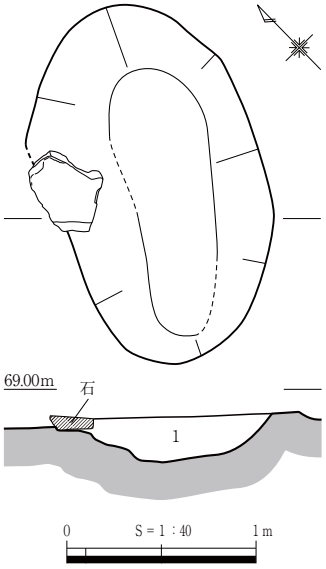
土坑６（第 68･69 図、PL.37）

西区 J30 グリッド、標高 68.8 mの丘陵平坦部に位置する。平面形は長軸 1.9 m、短軸 1.1 mの楕円形を呈し、深さは 0.25 mである。底面形は皿状を呈する。埋土はロームブロック混じりの単層で、人為的に埋め戻された可能性が高い。埋土上層から扁平な礫が１点出土している。遺物は粗製土器の体



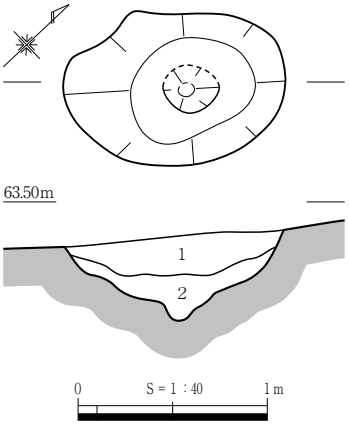
1　褐色土（10YR4/4）しまり強、粘性弱。
径５mm 以下の炭化物僅かに含む。

第67図　土坑５



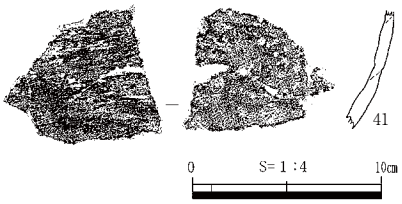
1　褐色土（10YR4/4）しまり強、粘性弱。
径１cm 以下のロームブロック僅かに含む。

第68図　土坑６

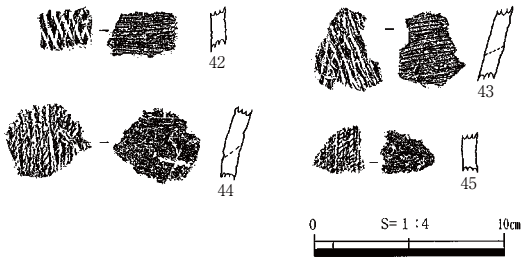


1　黒褐色土（10YR3/1）しまり・粘性中。
2　暗褐色土（10YR3/3）しまり・粘性中。
径１cm 以下のローム粒多く含む。

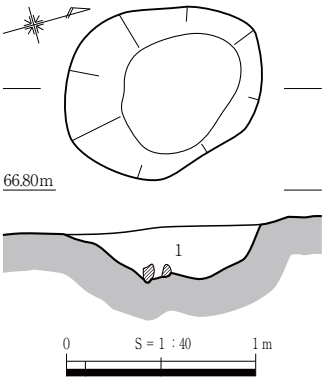
第70図　土坑７



第69図　土坑６出土遺物



第72図　土坑８出土遺物



1　黒色土（10YR1.7/1）しまり・粘性中。
拳大の礫少し含む。

第71図　土坑８

部片 41 が出土している。外面はケズリ、内面はケズリ後ナデが施されている。本遺跡で出土する晩期の土器に胎土や調整が類似している。

よって、本遺構の時期は出土土器から縄文時代晩期と考えられる。遺構の性格は不明である。

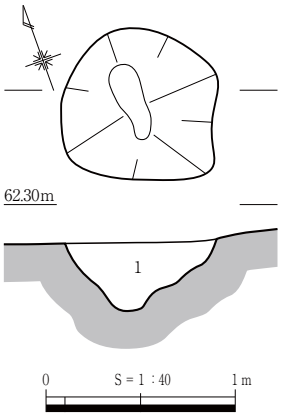
土坑７（第 70 図）

西区Ｋ 34 グリッド、標高 63.3 ｍの谷部斜面に位置する。平面形は長軸 1.1 ｍ、短径 0.8 ｍのやや歪な楕円形を呈する。深さは 0.45m である。底面は擂り鉢状を呈する。埋土は黒褐色土で、谷部に堆積するクロボク層に由来する。遺物は縄文土器片が出土したが、細片のため図化しえない。

本遺構の時期は谷部Ⅴ -2 層を掘り込んでいることから縄文時代晩期以降と考えられる。遺構の性格は不明である。

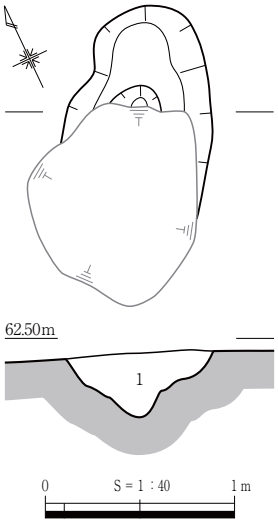
土坑８（第 71･72 図、PL.40･41）

西区Ｌ 35 グリッド、標高 66.6 ｍの谷底に位置する。平面形は長軸 1.1 ｍ、短軸 0.8 ｍのやや歪な楕



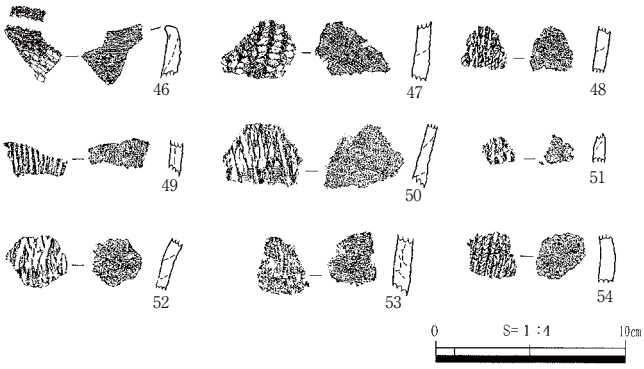
1　黒褐色土（10YR2/2）　しまり・粘性弱。
径５cm 以下の褐色土ブロック少し含む。

第73図　土坑９



1　黒色土（10YR1.7/1）しまり・粘性中。
暗褐色土ブロック多く含む。

第74図　土坑10



第75図　土坑10出土遺物

円形を呈し、深さは 0.3 mである。埋土は黒色土の単層で、拳大の礫を少量含んでいる。遺物は縄文土器が出土し、図化したものには撚糸文が施される 42 ～ 45 がある。里木Ⅱ式併行と考えられる。その他に黒曜石製の剥片も出土したが、細片のため図化しえなかった。

出土土器は縄文時代中期後葉のものと考えられるが、遺構の検出層位が谷部Ⅴ -2 層上面であることから時期は縄文時代晩期以降と考えられる。遺構の性格は不明である。

土坑９（第 73 図）

西区Ｌ 34 グリッド、標高 62.1 mの谷底に位置する。平面形は径 0.8 mの歪な円形を呈し、深さは 0.35 mである。断面形は擂り鉢状を呈する。埋土は黒褐色の単層である。遺物は出土していない。

時期は遺構の検出層位が谷部Ⅴ -2 層上面であることから縄文時代晩期以降と考えられる。遺構の性格は不明である。

土坑 10（第 74･75 図、PL.37）

西区Ｌ 34 グリッド、標高 62.4 mの谷底に位置する。平面形は楕円形を呈するが、南西側を撹乱によって壊されているために正確ではない。規模は長軸が不明ながら、短軸 0.8 m、深さ 0.3 mである。埋土は黒色の単層で、谷部Ⅴ -2 層に由来する暗褐色土のブロックが混じる。遺物は縄文土器が出土し、図化したものは縄文地の 46・47、撚糸文が施される 48 ～ 54 である。いずれも里木Ⅱ式併行と考えられる。その他に図化していないが、黒曜石製の剥片が出土している。

本遺構の時期は出土土器から縄文時代中期後葉と考えられる。遺構の性格は不明である。

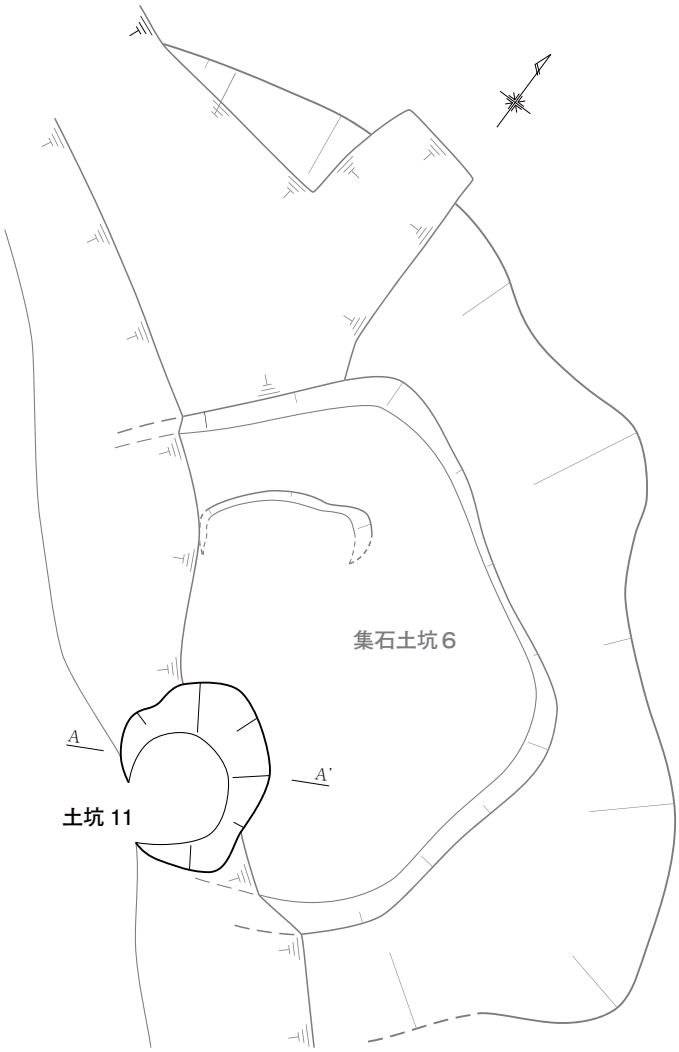
土坑 11（第 76･77 図）

西区Ｋ 32 グリッド、標高 66.6 mの丘陵肩部の傾斜変換付近に位置する。上部の谷側を大きく削平され、遺存状態は良くない。縄文時代の集石土坑６と重複関係にあり、本遺構が後出する。平面形は長径 1.0 m、短径 0.8 mの楕円形で、深さは 0.3 mである。底面形状は平坦である。埋土は暗褐色土の単層である。遺物は埋土から縄文土器と黒曜石製の剥片が出土している。縄文土器 55 は撚糸文が施され、里木Ⅱ式併行と考えられる。

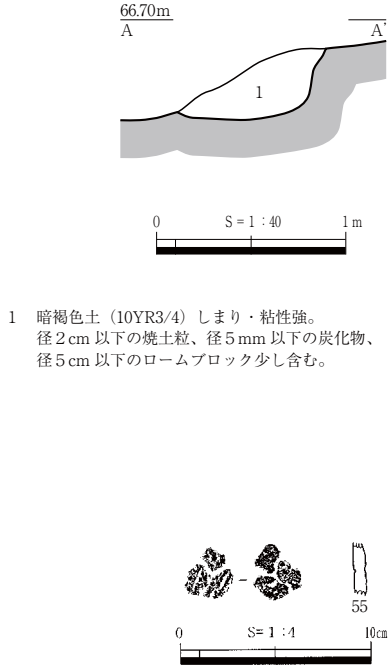
時期は遺構の検出層位が谷部Ⅴ -3 層であることから中期末葉以降と考えられる。遺構の性格は不明である。

土坑 12（第 78 図）

西区Ｋ 31 グリッド、標高 67.8 mの丘陵平坦部に位置する。調査当初は東半と西半で別々の遺構と



第76図　土坑11



第77図　土坑11出土遺物

して調査を進めたが、最終的に同一遺構と判断している。平面形は中央が括れて両端が広がる瓢箪形を呈する。規模は長軸 2.5 m、括れ部の幅 0.5 m、両端の広がる部分が最大幅 0.95 mである。0.23 mである。縦断面形は底面に向けて窄まる逆凸状を呈する。底面は樹根等の撹乱による凹凸が激しい。

遺物は図化していないが、縄文土器の小片と黒曜石の剥片が出土している。詳細な時期や性格は不明である。

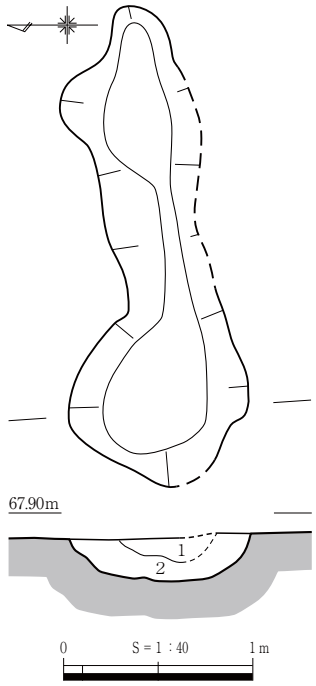
土坑 36（第 79･80 図、PL.55-1）

西区Ⅰ 31 グリッド、標高 68.6 mの丘陵平坦部に位置する。遺構は楕円形を呈する部分と、東側に延びる溝状の部分とからなる。規模は楕円形部分が長軸 1.0 m、短軸 0.8 m、深さ 0.1 mで、溝状部分が長さ 0.5 m、最大幅 0.4 m、深さ 0.09 mである。楕円形部分の底面東側には径 23㎝、深さ 50㎝のピットが伴う。遺物は縄文土器の細片と黒曜石製の石鏃Ｓ 14 が出土した。土器は細片のため図化しえなかった。Ｓ 14 は大型の凹基無茎石鏃である。

本遺構の詳細な時期や性格は不明である。

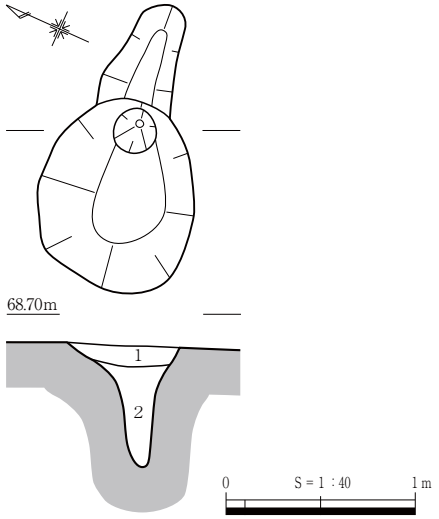
土坑 40（第 81 図）

西区Ⅰ 33 グリッド、標高 67.3 mの丘陵平坦部に位置する。平面形は長軸 1.2 m、短軸 0.7 mの方形を呈し、深さ 0.45 mである。底面は平坦である。埋土は地山由来の黄褐色ロームブロックを多く含む暗褐色土の単層である。遺物は出土していない。



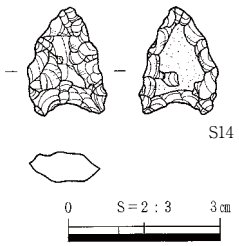
1　褐色土（7.5YR4/3）しまり弱、粘性中
2　灰黄褐色土（10YR4/2）しまり弱、粘性中。
　径３cm 以下のロームブロック多く含む。

第78図　土坑12

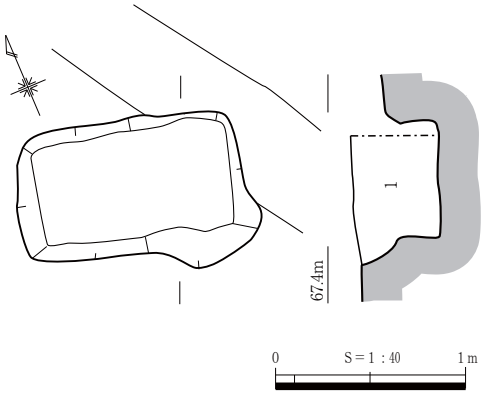


1　暗褐色土（10YR3/4）しまり・粘性中。
　径２cm 以下の黄褐色ロームブロック僅かに含む。
2　灰褐色土（7.5YR4/2）ロームブロック少し含む。

第79図　土坑36

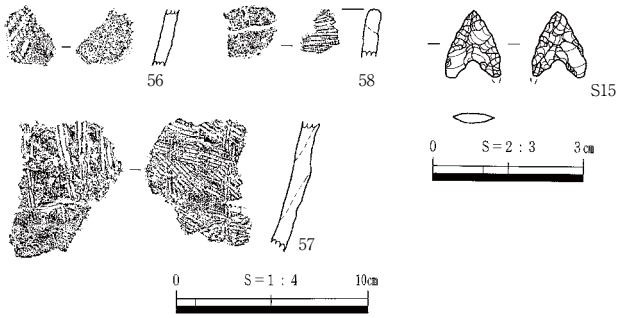


第80図　土坑36出土遺物



1　暗褐色土（10YR3/3）粘性強。しまり弱。
　2cm 以下の黄褐色ブロックを僅かに含む。

第81図　土坑40



第82図　西区ピット出土遺物

時期は埋土の特徴や周囲の遺構状況から縄文時代と考えるが、詳細には特定できない。遺構の性格は規模や形態、埋土の特徴から墓壙の可能性がある。

６　ピット出土遺物（第 82 図、PL.37）

西区では建物等を構成しないピットが多数検出されており、ここではこれらのピットから出土した当該期の遺物について述べる。

56 はＰ 52 から出土している。LR 縄文が施され、里木Ⅱ式併行と考えられる。57 はＰ 51 から出土した粗製深鉢である。内外面条痕地で、縄文時代晩期頃のものと考えられる。58 はＰ 138 から出土している。内面条痕が施され、縄文時代晩期頃のものと考えられる。Ｓ 15 はＰ 30 から出土した黒曜石製の凹基無茎石鏃である。

７　西区谷部包含層出土遺物

西区谷部からは多量の縄文土器や石器が出土している。黒褐色土を主体とする包含層は４層に分層され、遺物はⅤ-１、Ⅴ-２層に集中する。最下層のⅤ-３層を除き、Ⅴ-０層からⅤ-２層は縄文時代晩期の遺物を包含しており、この時期に他の時期の遺物を巻き込みながら堆積したものと考えられる。

谷部Ⅴ -0 層出土遺物（第 83 図、PL.36-2･52･54･56-2）

図化した遺物は磨消縄文が施される深鉢59､突帯文土器60～65､黒曜石製石器Ｓ 16～Ｓ 19である。

59はやや太い沈線間にRL縄文による磨消縄文が施されるもので、中津式から福田KⅡ式古段階に併行するものと考えられる。突帯文土器60は、口縁部からやや下がった位置に刻み目をもつ貼り付け突帯をもつものである。62は口縁端部に刻み目突帯をもつもの、65は突帯に刻み目をもたないものである。60は濵田編年晩期Ⅴ期、62は濵田編年晩期Ⅵ期古段階、65は濵田編年晩期Ⅵ期新段階に併行するものと考えられる。

また、粗製土器64・65には、補修孔と思われる穿孔が施される。

石鏃はＳ16は平基無茎石鏃､Ｓ17は細長の凹基無茎石鏃､Ｓ19は小型の凹基無茎石鏃未成品である。Ｓ18は楔形石器である。

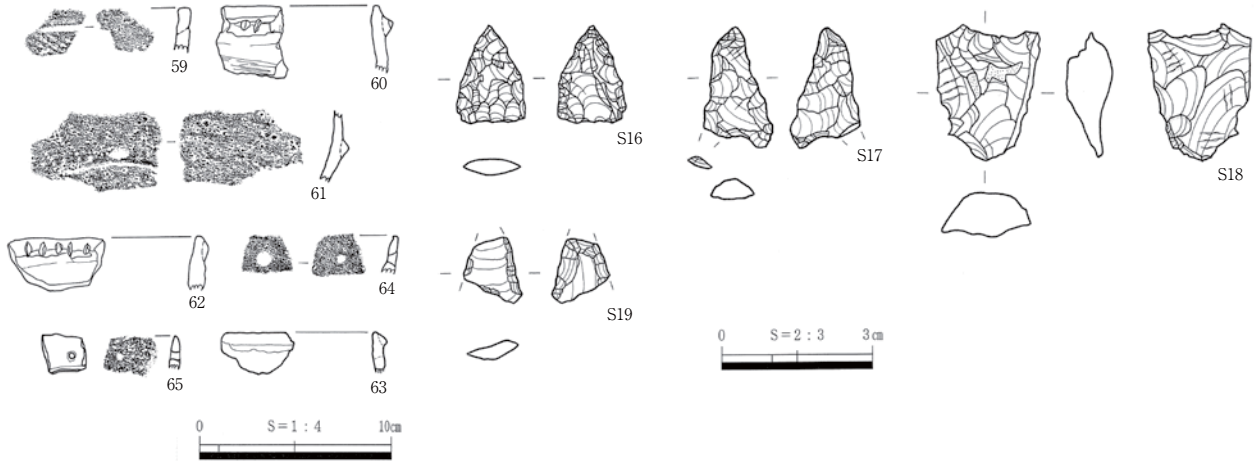
谷部Ⅴ -1 層出土遺物（第 84 ～ 87 図、PL.38･39･52･53）

図化した遺物は縄文地の深鉢片66、撚糸文が施される67 ～ 97、内外面条痕が施される98 ～ 104、外面沈線文が施される105 ～ 118、磨消縄文が施される119 ～ 123、沈線文が施される126、凹線文が施される124・125、刺突文が施される127、突帯文が施される128 ～ 136、粗製土器137 ～ 141、石鏃Ｓ20 ～ Ｓ59、石匙Ｓ60、楔形石器Ｓ61、削器Ｓ62、黒曜石石核Ｓ63、磨製石斧Ｓ64、敲石Ｓ65、石皿Ｓ66である。

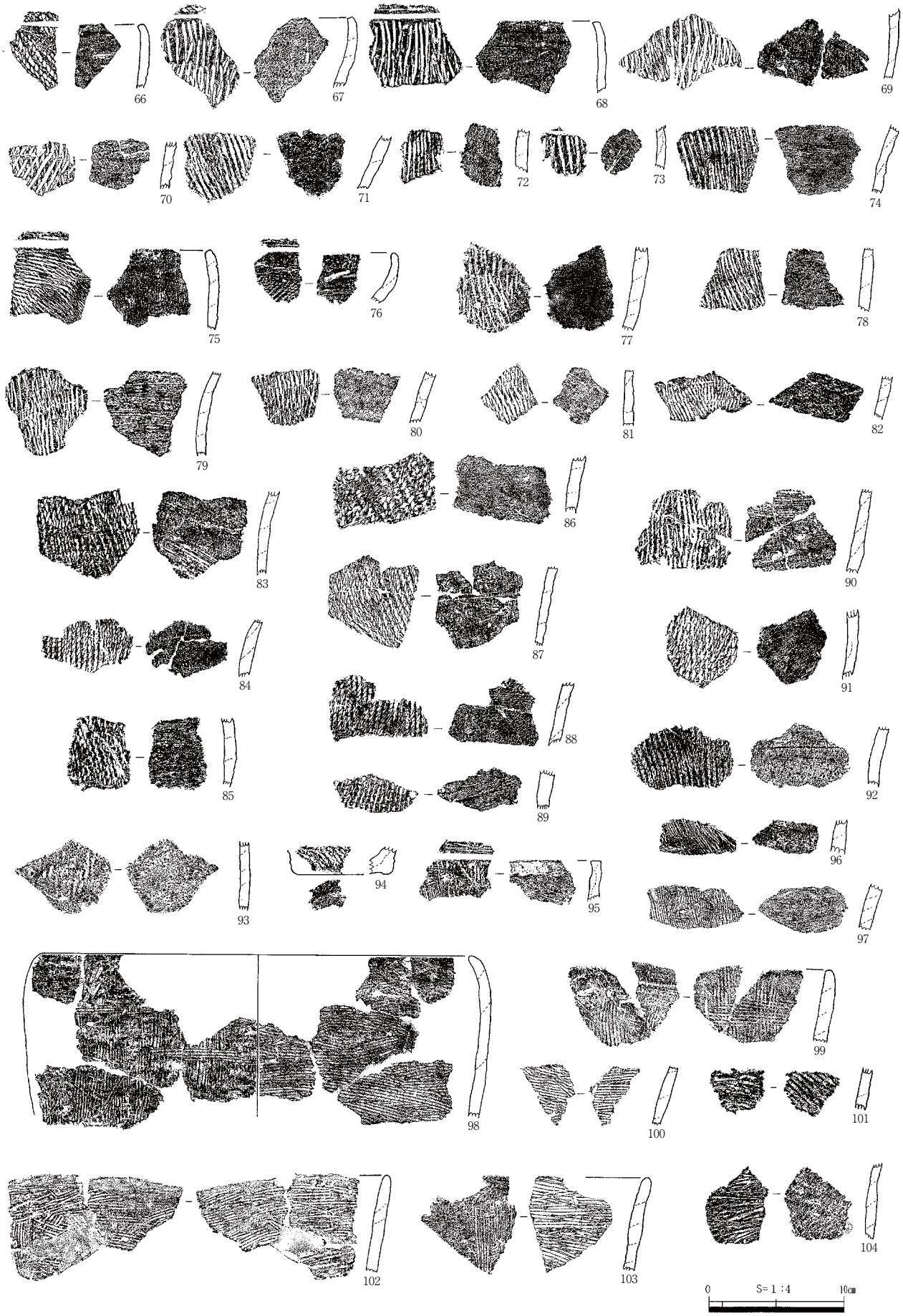
66は節の揃ったRL原体による回転縄文が施されるものである。撚糸文が施されるもののうち、67 ～ 74は撚りの粗いもの、75 ～ 82はやや目の詰まった撚糸文、83 ～ 94はRL原体の撚糸が用いられるもの、95 ～ 97は極細の撚糸文が施されるものである。これらは、里木Ⅱ式に相当するものと考えられる。

条痕文が施されるもののうち、98・99 は縦横に条痕が施されるもので、100 ～ 104 は横方向の条痕が施されるものである。これらは、里木Ⅲ式に相当するものと考えられる。

沈線文が施される 105 ～ 118 は、北白川Ｃ式に相当するものと考えられる。



第83図　谷部Ⅴ-0層出土遺物



第84図　谷Ⅴ-1層出土遺物（１）

第85図　谷部Ⅴ-1層出土遺物（２）

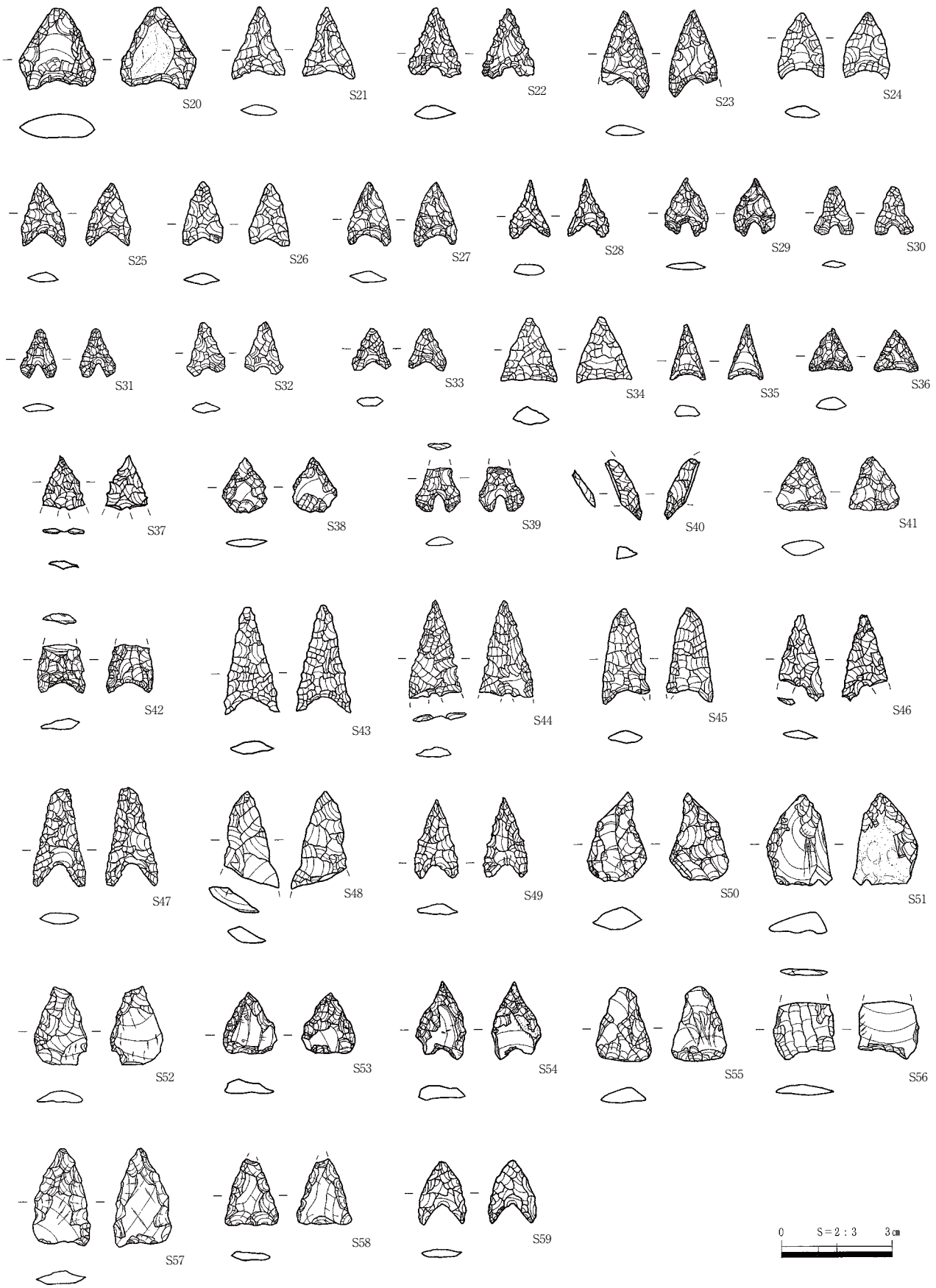
磨消縄文が施されるもののうち、119・121 ～ 123 は RL 縄文原体を転がすもの、120 は LR 縄文原体を転がすもので、沈線の継ぎ目が途切れることから五明田式（福田 KⅡ式古段階）併行期のものと考えられる。

凹線文が施される 124・125 は、宮滝式併行と考えられる。126 は滋賀里式併行、127 は、体部中位に刺突文が施されるもので、濵田編年晩期Ⅲ期新段階に併行するものと考えられる。

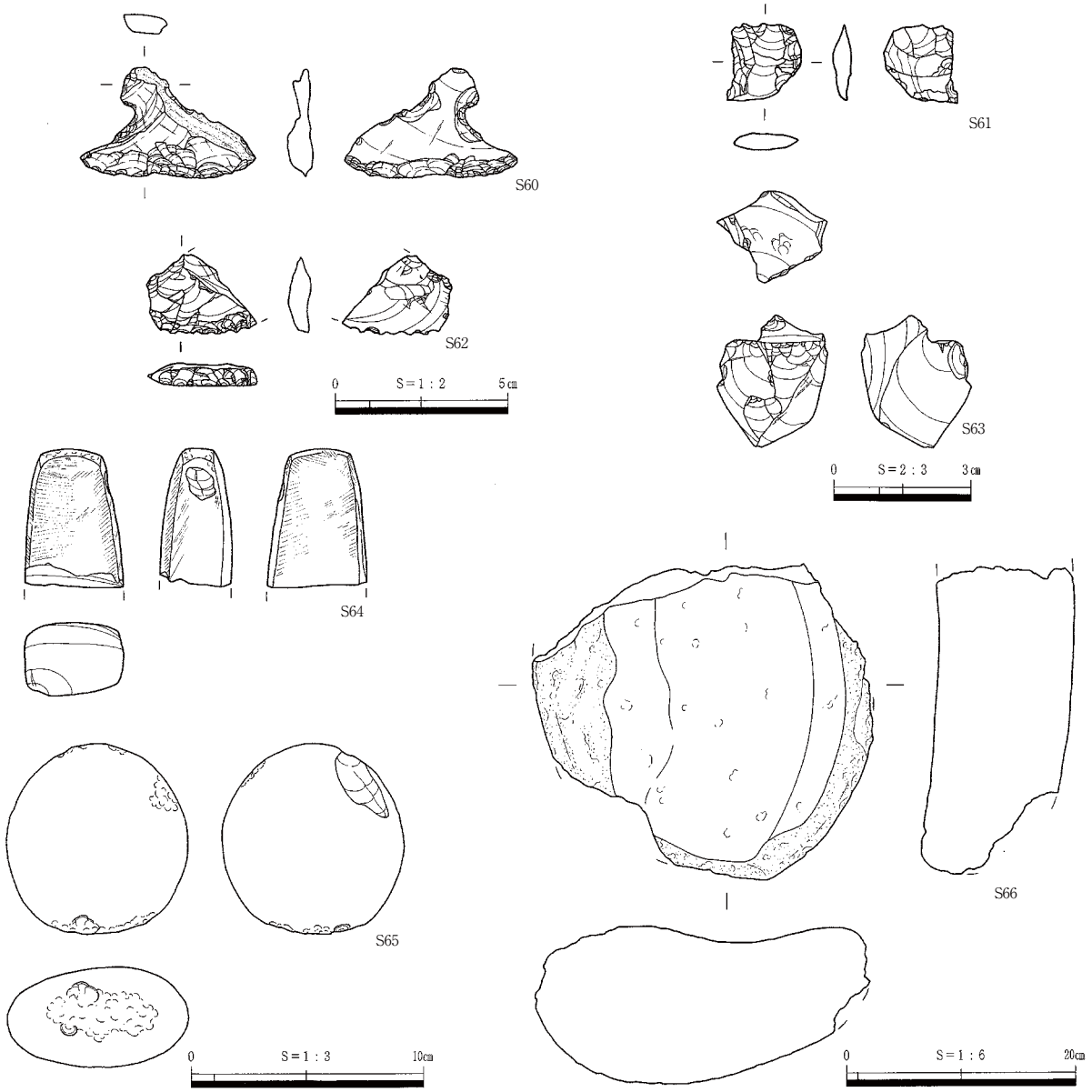
突帯文土器のうち、128・129は口縁部からやや下がった位置に刻み目をもつ貼り付け突帯をもつもので、濵田編年晩期Ⅴ期に相当するものと考えられる。130 ～ 134は口縁部に接するように刻み目をもつ貼り付け突帯をもつもので、濵田編年晩期Ⅵ期古段階に併行するものと考えられる。135は刻み目をもたない貼り付け突帯をもつもので、濵田編年晩期Ⅵ期新段階に併行するものと考えられる。

粗製土器137 ～ 141の帰属時期は不明であるが、底部片の141は平底を呈すことから、後期頃のものと考えられる。

石鏃には黒曜石製とサヌカイト製があり、黒曜石製石鏃が優占する。S 20 ～ S 40・S 42 ～ S 49は



第86図　谷部Ⅴ-1層出土遺物（３）



第87図　谷部Ⅴ-1層出土遺物（４）

黒曜石製の凹基無茎石鏃、Ｓ41は黒曜石製の平基無茎石鏃である。幅広のものから細長のもの、大型から小型のものを含み、バラエティに富む。Ｓ50～Ｓ56は、黒曜石製の石鏃未成品・失敗品である。Ｓ57～Ｓ59はサヌカイト製の平基無茎石鏃である。

Ｓ60はサヌカイト製の横型石匙、Ｓ62は黒曜石製の削器、Ｓ63は黒曜石石核である。また、Ｓ64は刃部を失った頁岩製の磨製石斧、Ｓ65はデイサイト製の敲石、Ｓ66は大型で、溶岩製の石皿である。

谷部Ⅴ -2 層出土遺物（第 88 ～ 94 図、PL.36-3･40 ～ 45-1･52･54･56･58-4･59-1）

図化した遺物は外面刺突文が施される深鉢142、外面縄文地の深鉢143 ～ 145、撚糸文後隆帯及び沈線が施される深鉢146 ～ 154・202、撚糸文が施される深鉢155 ～ 194、内外面条痕が施される深鉢195 ～ 200、外面撚糸文、内面条痕が施される深鉢201、粗製土器深鉢203、沈線文が施される204 ～ 244、縄文後沈線が施される245 ～ 271、磨消縄文が施される深鉢272 ～ 275、凹線文が施される深鉢ないし浅鉢276、沈線文が施される深鉢277・278、外面刺突文・沈線文が施される279、突帯文が施される280 ～ 289、粗製土器290 ～ 298、底部299 ～ 308、幅広で浅い沈線文が施される鉢309、石

鏃Ｓ67 ～ Ｓ111、石匙Ｓ112、石錐Ｓ113、削器Ｓ114 ～ Ｓ117、楔形石器Ｓ118・119、黒曜石石核Ｓ120・121、二次加工のあるサヌカイト剥片Ｓ122、黒曜石剥片Ｓ123、磨製石斧Ｓ124、石錘Ｓ125 ～ Ｓ131、凹石Ｓ132、磨石Ｓ133 ～ Ｓ135がある。

142は外面クサビ形の刺突文、内面条痕が施されるもので、船元・里木土器様式第３様式に併行するものと考えられる。143 ～ 145はLR単節縄文が施されるもので船元・里木土器様式第３様式に併行するものと考えられる。

撚糸文地に隆帯及び沈線・刺突文が施される146 ～ 154・202のうち、147・148は撚糸文地に沈線で区画された縦方向の隆帯をもつもの、149 ～ 152・154・202は撚糸文地に沈線が施されるもの、153は撚糸文地に刺突文が施されるものである。これらは、船元・里木様式第３様式に併行するものと考えられる。

155 ～ 194 は撚糸文地の深鉢片で船元・里木土器様式第４様式併行と考えられる。195 ～ 200 は内外面貝殻復縁による条痕地となっており、船元・里木土器様式第６様式併行と考えられる。

204 ～ 243は北白川Ｃ式併行と考えられるもので、204は波状口縁をもち条痕後に沈線文が施される。205は波状口縁をもち磨消縄文が施され、北白川Ｃ式４期併行と考えられる。206・207は突起状の波状口縁をもち、沈線・刺突文で飾られる。208は波状口縁をもちLR縄文後に沈線文が施される。209は波状口縁をもち、波頂部に貫通する円孔、沈線による渦巻文が施される。210 ～ 212は波状口縁をもち、LR縄文地に沈線･刺突文が施される。213 ～ 217･222 ～ 235は、沈線文･刺突文が施される。218はLR縄文による磨消縄文が施され、北白川Ｃ式４期併行と考えられる。219・220は、口縁端部円形刺突文､波状沈線文が施される。236･237は条痕後沈線による紡錘文､238 ～ 240･241･243は沈線文、242は撚糸文後沈線文が施される。244 ～ 269･270は、縄文地に沈線文が施される。270は条痕後沈線･刺突文が施されるものである。

272 ～ 275はLR縄文による磨消縄文が施されるもので、沈線が太く継ぎ目がないことから、中津古段階併行期と考えられる。276は凹線文・刺突文が施されるもので、宮滝式併行と考えられる。

277・278は半截竹管状工具による沈線文が施されるもので、滋賀里式併行と考えられる。279は外面頸部と体部境に刺突文､沈線による波状文が施されるもので､濵田編年晩期Ⅲ期併行と考えられる。

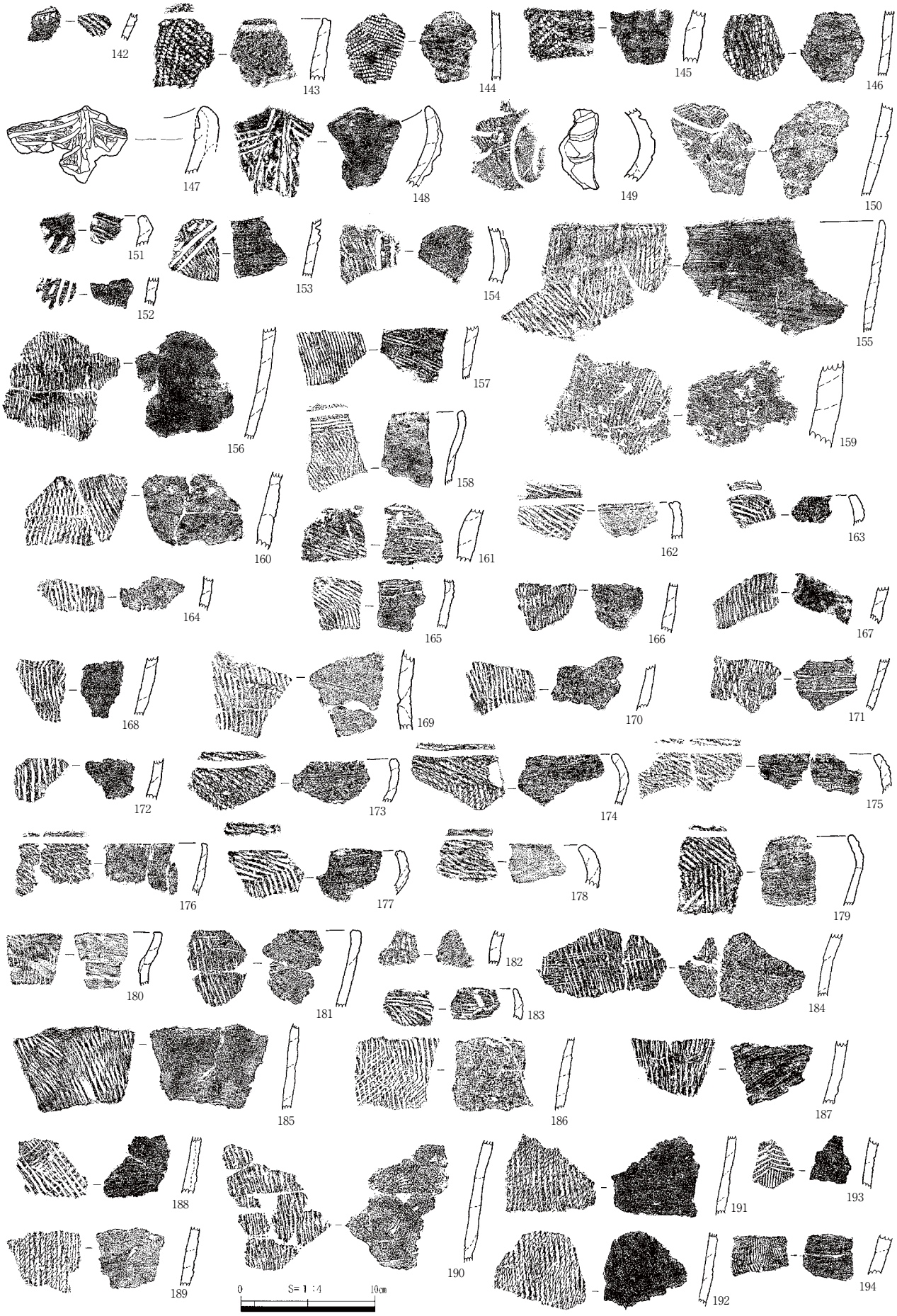
突帯文土器280 ～ 289は口縁部に接するかやや下がった位置に刻み目のある貼り付け突帯をもつもので、濵田編年晩期Ⅴ期古段階併行と考えられる。

290 ～ 298は粗製土器で、後期から晩期にかけてのものと考えられる。底部299 ～ 308はしっかりした平底をもつもので、晩期以前のものと考えられる。309は赤色塗彩され、幅広の沈線文が施されるものである。大洞Ａ式に併行するものと考えられる。

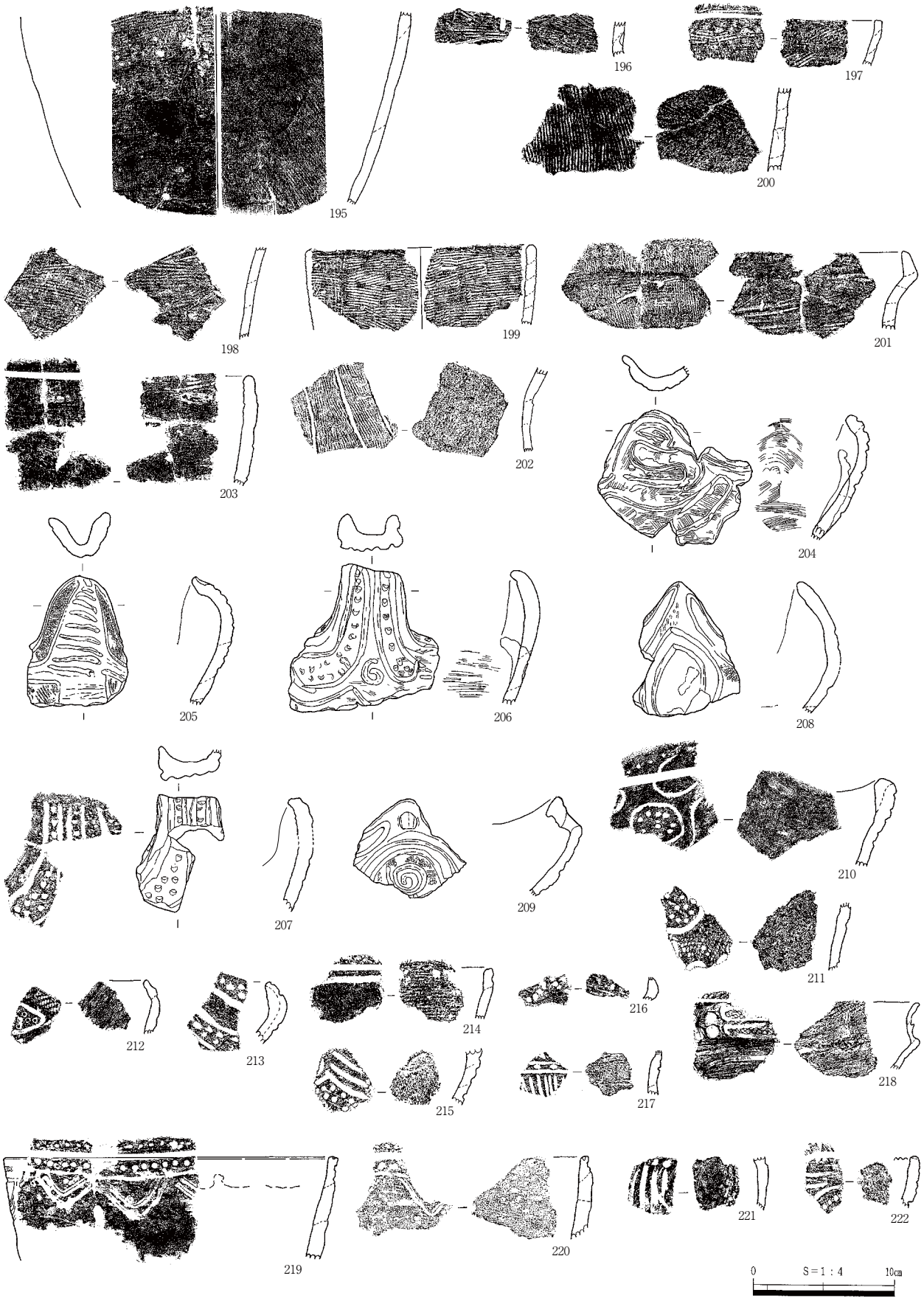
石鏃には黒曜石製とサヌカイト製があり、黒曜石製が優占する。Ｓ67 ～ Ｓ100は黒曜石製の凹基無茎石鏃である。形態的にはバラエティに富む。Ｓ99・100は異形である。Ｓ103 ～ Ｓ108は黒曜石製の石鏃未成品である。Ｓ109 ～ Ｓ111はサヌカイト製の凹基無茎石鏃である。

Ｓ112はサヌカイト製の縦型石匙、Ｓ113は黒曜石製の石錐である。削器のうちＳ114・115は黒曜石製、Ｓ116･117はサヌカイト製である。Ｓ118･119は黒曜石製の楔形石器、Ｓ120･121は黒曜石石核、Ｓ108は二次加工のあるサヌカイト剥片、Ｓ109は黒曜石剥片である。

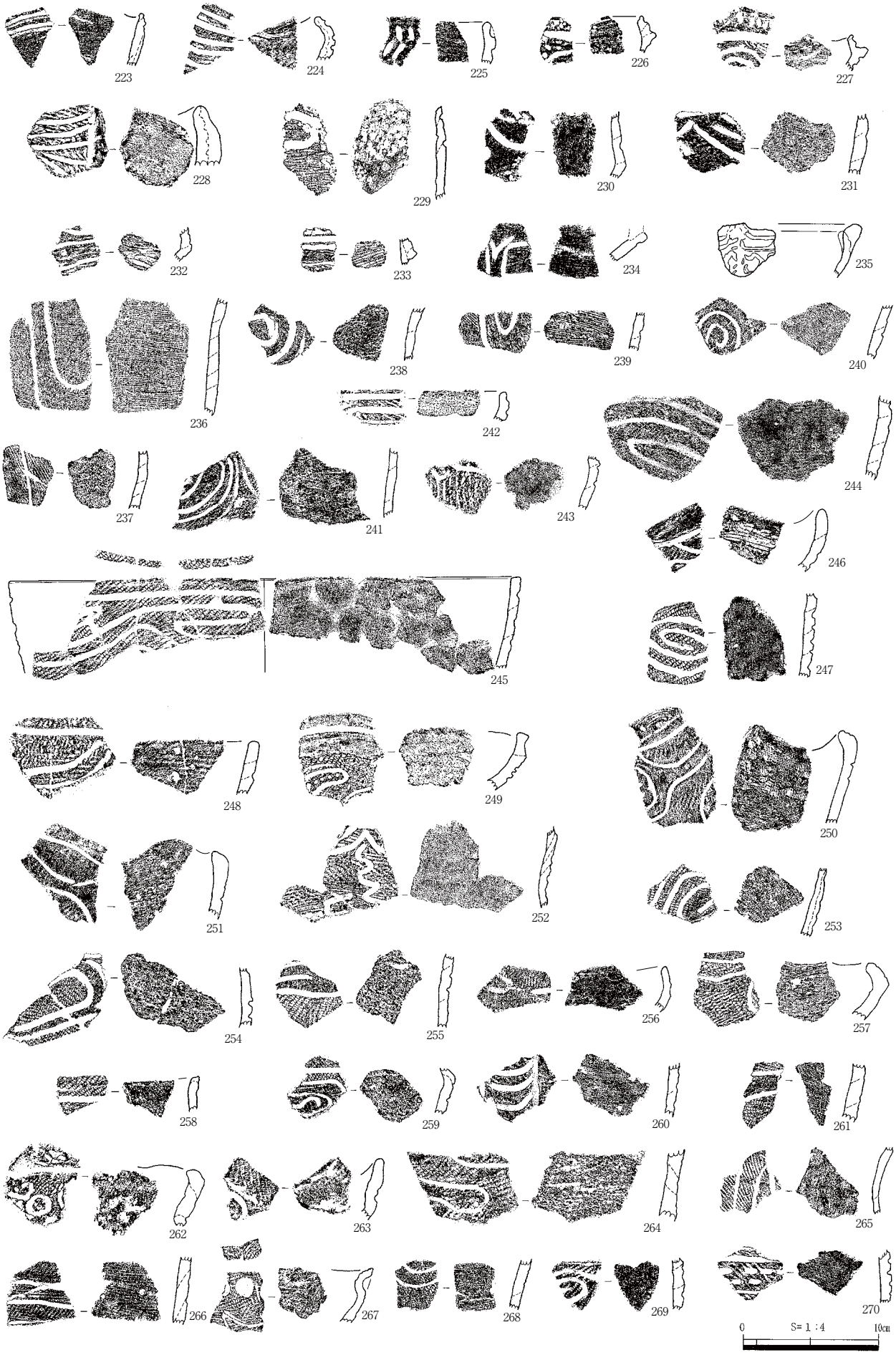
Ｓ124は刃部を失った頁岩製の磨製石斧、石錘のうちＳ125・Ｓ128は粘板岩製の切れ目石錘、その他は安山岩製の打ち欠き石錘である。小型から大型のものまである。Ｓ128は棒状の切れ目石錘であ



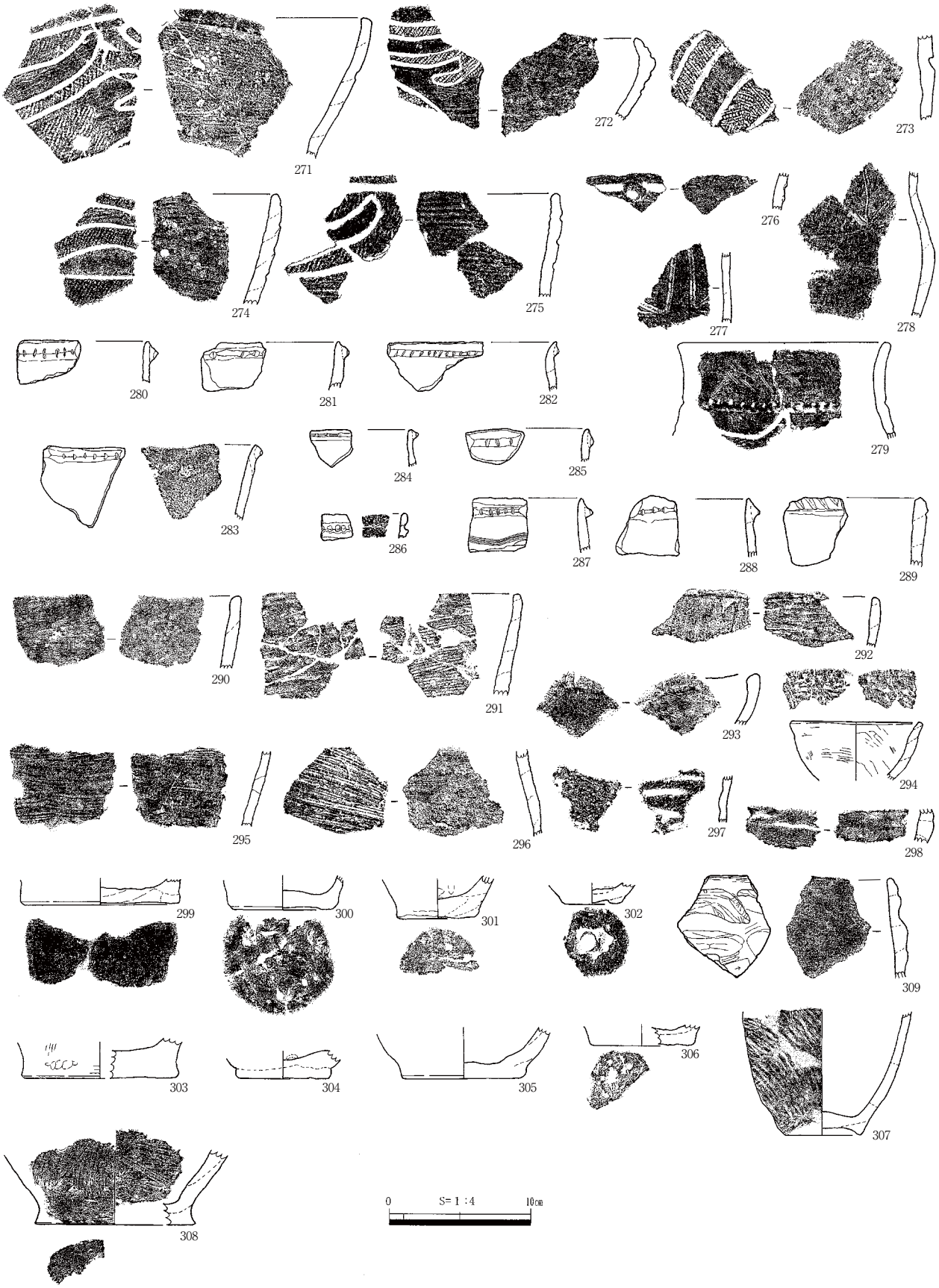
第88図　谷部Ⅴ-2層出土遺物（１）



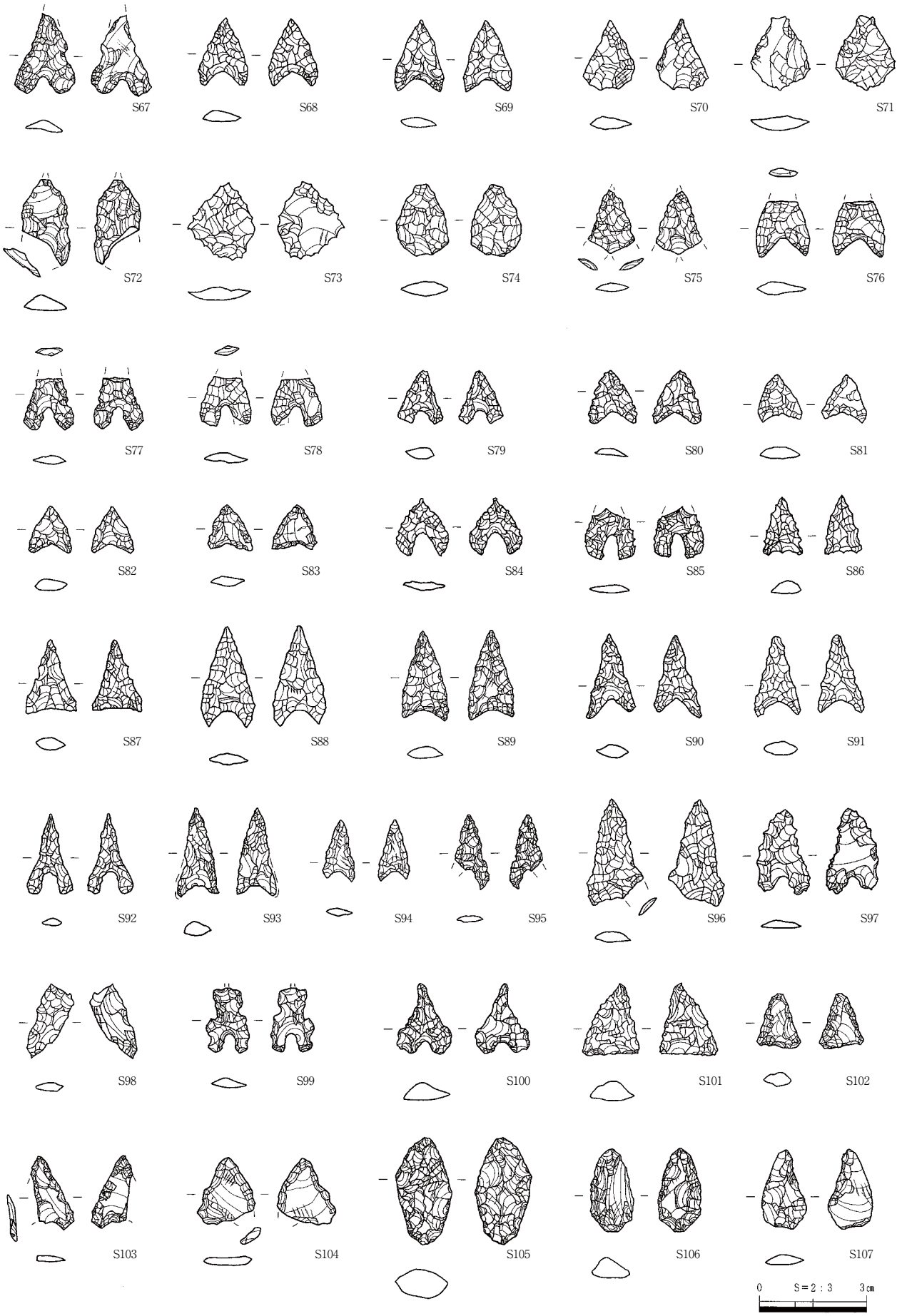
第89図　谷部Ⅴ-2層出土遺物（２）



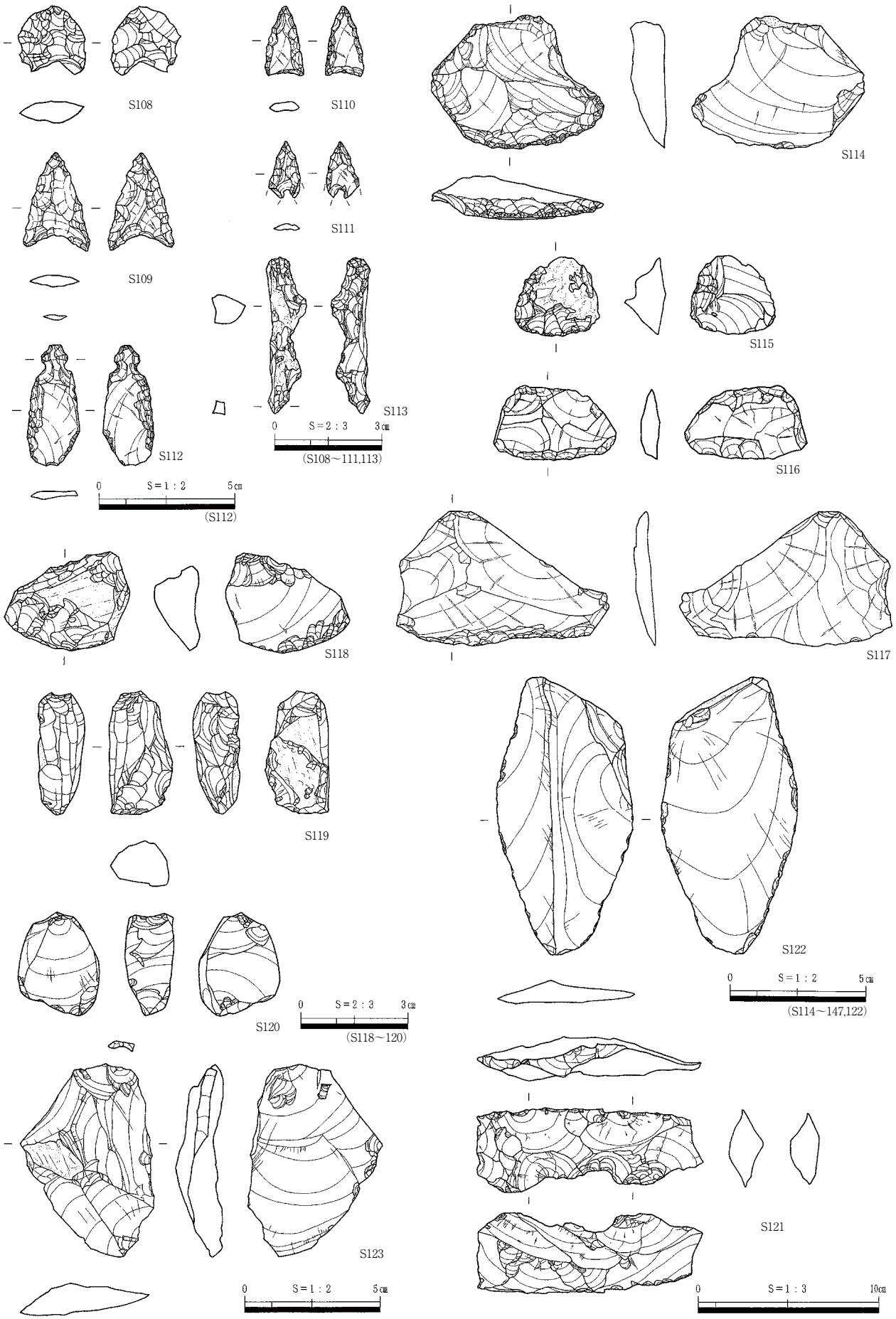
第90図　谷部Ⅴ-2層出土遺物（３）



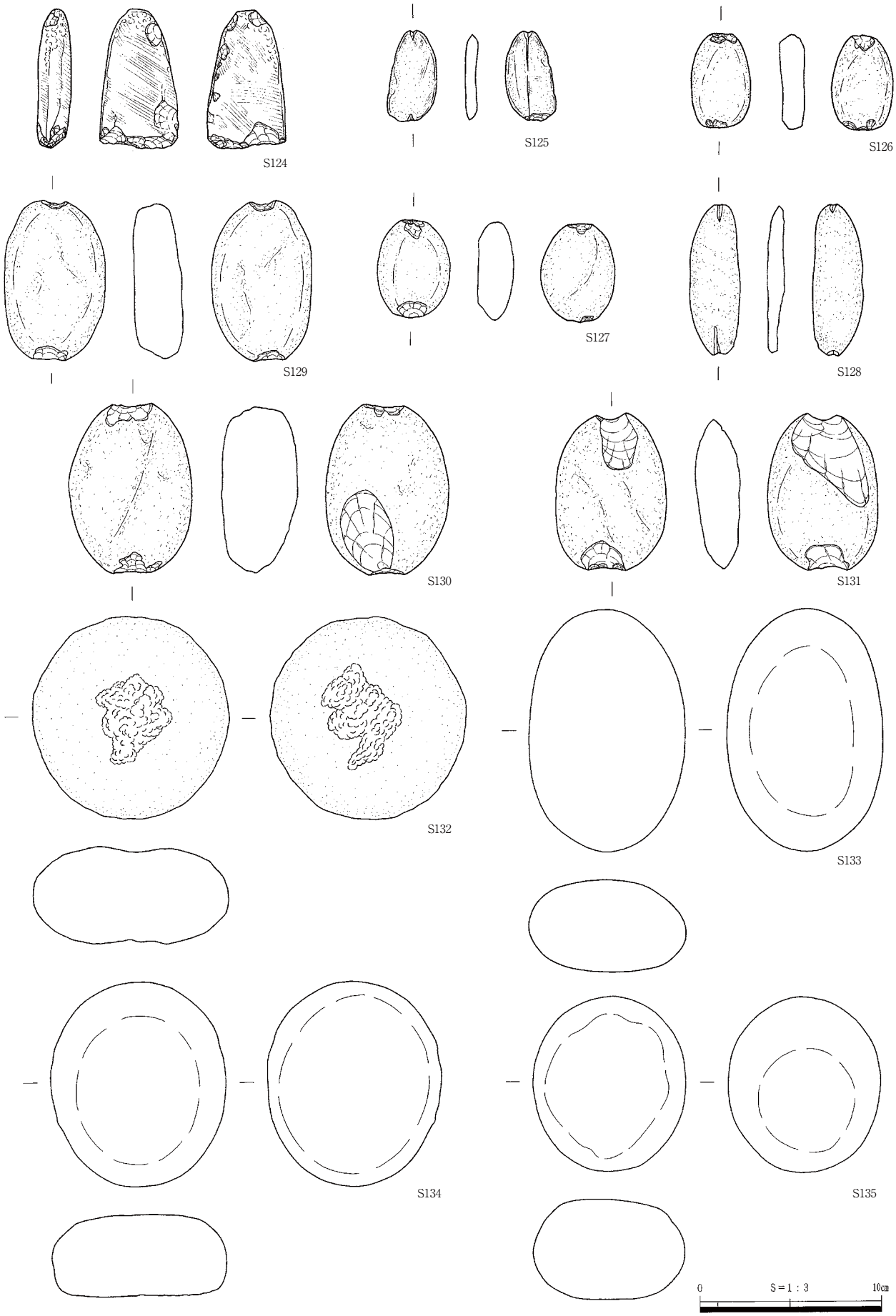
第91図　谷部Ⅴ-2層出土遺物（４）



第92図　谷部Ⅴ-2層出土遺物（５）



第93図　谷部Ⅴ-2層出土遺物（６）



第94図　谷部Ⅴ-2層出土遺物（７）

る。Ｓ132は角閃石安山岩製の凹石で両面に敲打面をもつ。磨石のうちＳ133・134はデイサイト製、Ｓ135は花崗岩製である。

谷部Ｖ -3 層出土遺物（第 95 図、PL.45-2･52-54･56-2）

図化した遺物は口縁部に肥厚帯をもつ 310、撚糸文が施される 311 ～ 318、沈線・刺突文が施される 319、縄文地に沈線文が施される 320、底部 321・322、石鏃Ｓ 122・123、削器 124 である。

310 は口縁部に貼り付け肥厚帯をもつもので、縄文地ではないが形態的に波子式に似る。

311 ～ 318 は撚糸文地の深鉢片で、船元・里木土器様式第４様式併行と考えられる

319・320 は北白川Ｃ式併行と考えられ、319 は沈線による円文に刺突文が施されるもの、320 は LR 縄文地に沈線文が施されるものである。

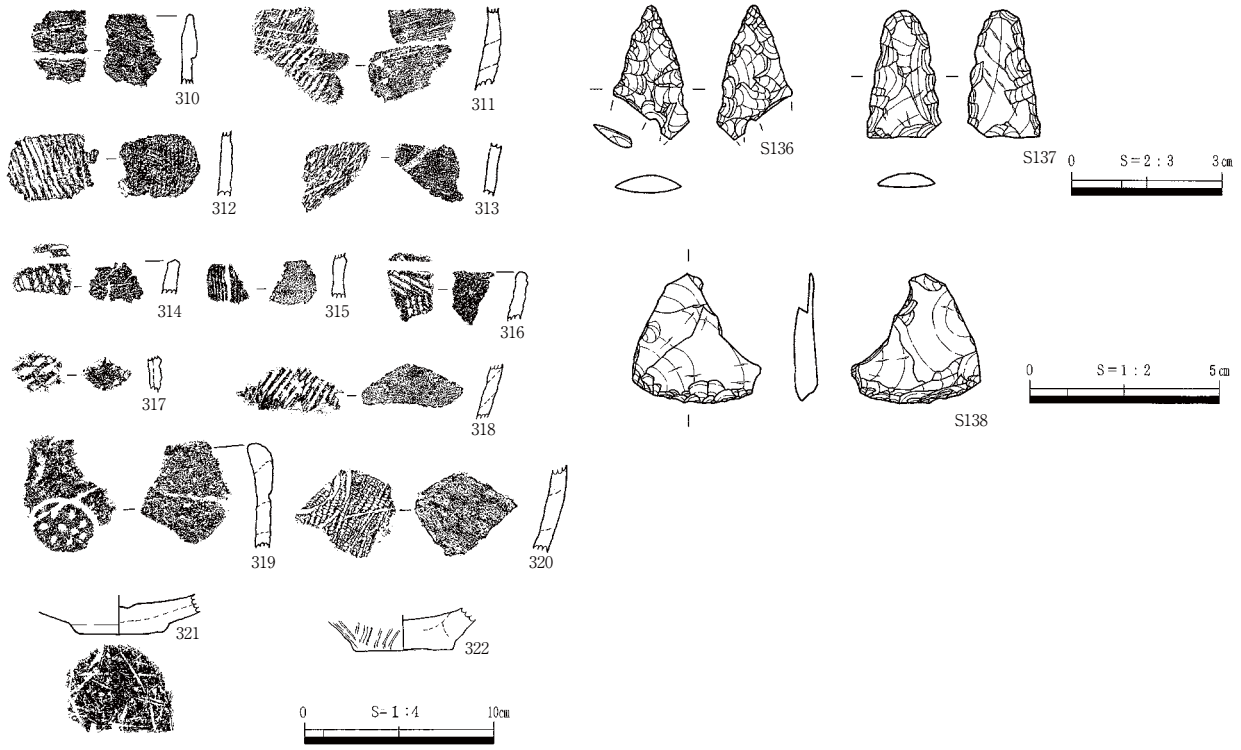
321・322 はしっかりとした平底をもつもので、中期から後期にかけてのものと考えられる。

Ｓ 136 は大型で黒曜石製の凹基無茎石鏃、Ｓ 137 は大型でサヌカイト製の平基無茎石鏃、Ｓ 138 はサヌカイト製の削器である。

８　その他の縄文時代出土遺物（第 96 ～ 99 図、PL.45-3 ～ 47-1･53･57）

表土や耕作土、撹乱土など遺構外からも当該期の遺物が多く出土しているが、西区からの出土が大半を占める。

図化した遺物はポジティブ楕円押型文をもつ 323 ～ 333、表裏縄文が施される 334、爪形文が施される 335、撚糸文地に沈線文が施される 336・337、撚糸文地の 338 ～ 354、内外面条痕が施される 355 ～ 357、外面条痕後沈線文が施される 358 ～ 360、縄文地に沈線が施される 361 ～ 364、沈線文が施される 365、縄文地に沈線文・刺突文が施される 366、縄文地に沈線文・条痕が施される 367、２条沈線による磨消縄文が施される 368、２条沈線が施される 369、３条沈線による磨消縄文が施される 370 ～ 372、粗製土器 373・378 ～ 381、口縁端部に刻み目が施される 374、刻み目のある貼り付け突



第95図　谷部Ｖ-3層出土遺物

帯をもつ 375 ～ 377、底部 382 ～ 384、沈線による工字文が施される 385、有茎尖頭器Ｓ 238、石鏃Ｓ 139 ～ Ｓ 203、石匙Ｓ 204・205、石錐Ｓ 206、削器Ｓ 207、楔形石器Ｓ 208 ～ Ｓ 211、二次加工のある剥片Ｓ 212 ～ Ｓ 215、黒曜石原石Ｓ 216、石錘Ｓ 217 ～ Ｓ 222、打製石鍬Ｓ 223、大型の石皿Ｓ 224 がある。

押型文土器 323 ～ 333 のうち、323 ～ 330 は整った楕円文で、黄島式併行と考えられる。331 ～ 333 は、粗大な楕円文となることから高山寺式併行と考えられる。323 ～ 332 は東区からの出土、333 は西区からの出土である。

表裏縄文が施される 334 は、繊維を含み菱根式併行と考えられる。西区からの出土である。爪形文が施される 335 は西川津式併行か。西区からの出土である。縄文地に沈線文が施される 336・337 は、船元・里木土器様式第４様式併行と考えられる。いずれも西区からの出土である。

撚糸文地の 338 ～ 354 は船元・里木土器様式第４様式併行と考えられる。東区からは 338・339・341・344 ～ 349・353、西区からは 340・342・343・350 ～ 352・354 が出土している。

内外面条痕が施される 355 ～ 357 は船元・里木土器様式第６様式併行と考えられる。東区からは 355、西区からは 356・357 が出土している。外面条痕後沈線文が施される 358 ～ 360、縄文地に沈線が施される 361 ～ 364、沈線文が施される 365、縄文地に沈線文・刺突文が施される 366、縄文地に沈線文・条痕が施される 367 は、いずれも北白川Ｃ式併行と考えられる。西区からの出土である。

２条沈線による磨消縄文が施される 368 は、福田ＫⅡ式古段階併行と考えられる。西区からの出土である。２条沈線が施される 369、３条沈線による磨消縄文が施される 370 ～ 372 は、福田ＫⅡ式新段階併行と考えられる。いずれも東区からの出土である。

粗製土器 373･378 ～ 381 は縄文時代後期から晩期にかけてのものと思われる。378･381 は東区から、373・379・380 は西区からの出土である。

口縁端部に刻み目が施される 374 は、濵田編年晩期Ⅲ期併行と考えられる。西区からの出土である。

刻み目のある貼り付け突帯をもつ 375 ～ 377 は、濵田編年晩期Ⅴ期併行と考えられる。377 が東区から、375・376 が西区からの出土である。

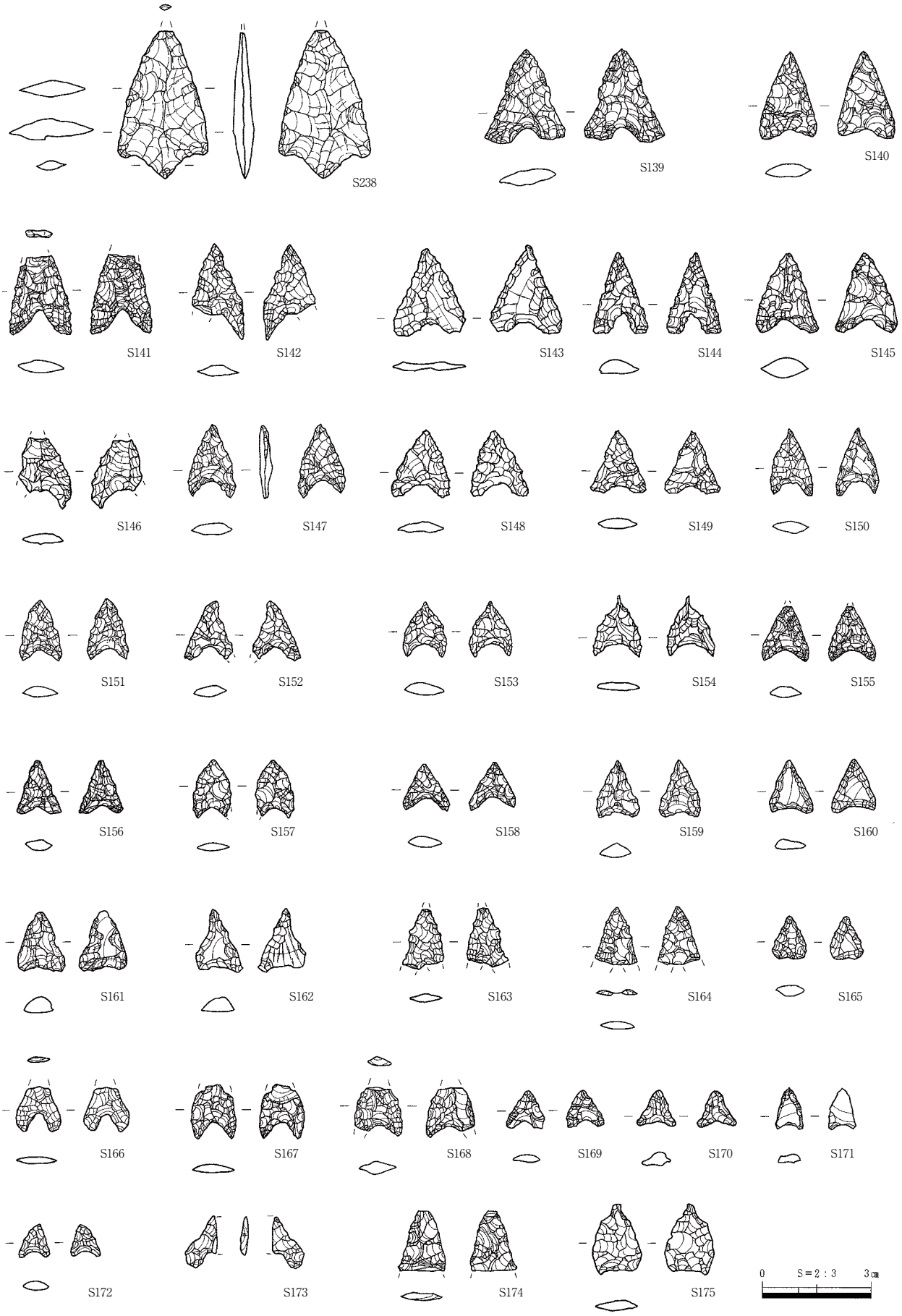
底部 382 ～ 384 は、しっかりとした底部をもつもので、晩期以前のものと考えられる。いずれも東区からの出土である。沈線による工字文が施される 385 は、大洞Ａ式に併行するものと考えられる。

Ｓ238は有茎尖頭器で、Ｂ区の１号製鉄炉の下の緩斜面から出土した。黒褐色土中に包含されており、原位置は遊離している。サヌカイトを石材とし、主に直接打撃で丁寧に仕上げる。刃部は直線的で基部の最大幅付近が最も厚い。有茎尖頭器としては短い形態に属するが、剥離面の切り合い関係から変形の痕跡は認められず本来の形態とみなされる。先端は僅かに折損する。表面側からの平坦な折れなので、投射による破損ではないと考えられる。

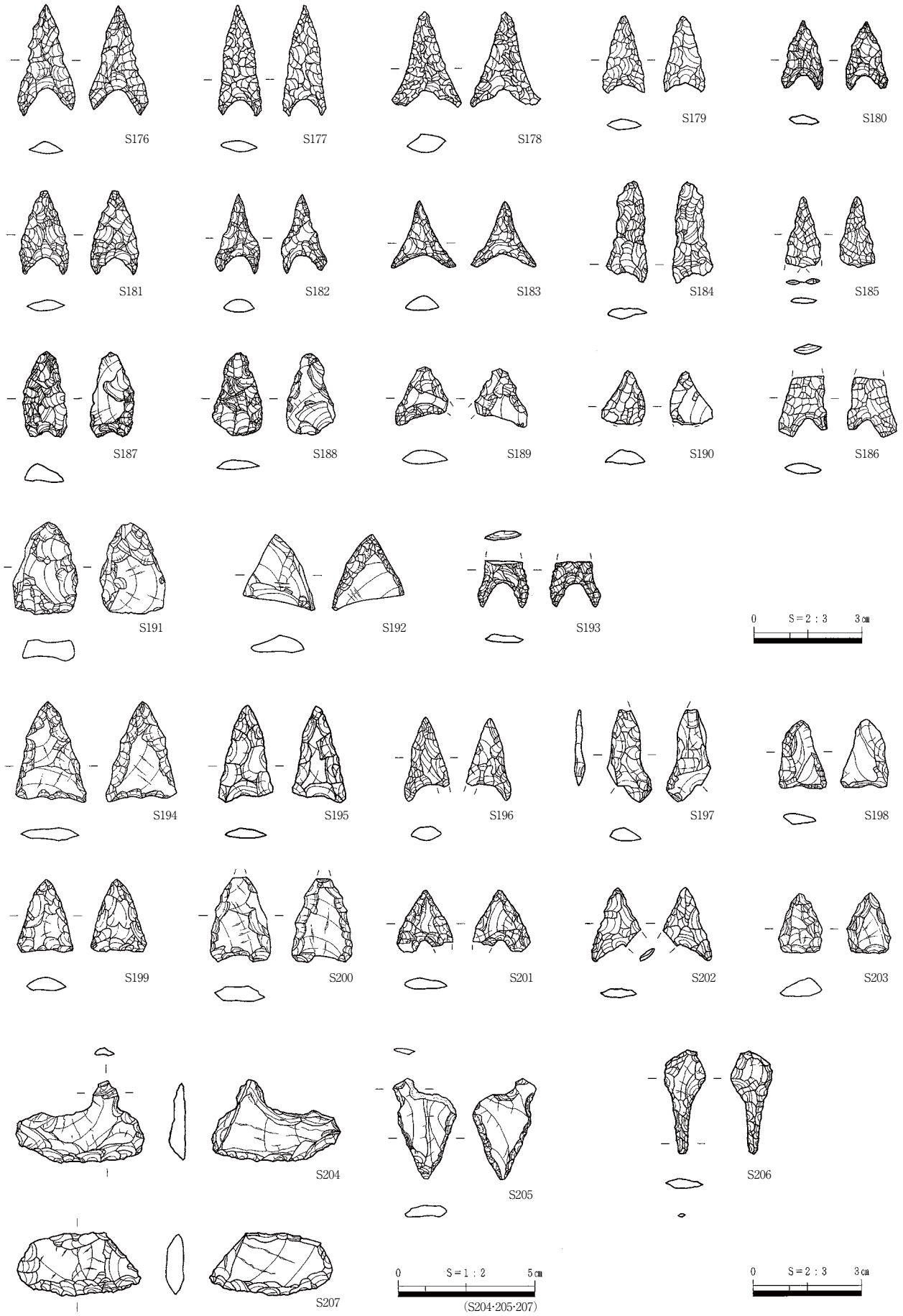
石鏃には黒曜石製とサヌカイト製があり、黒曜石製が優占する。Ｓ139 ～ Ｓ173は黒曜石製の凹基無茎石鏃、Ｓ174・175は黒曜石製の平基無茎石鏃、Ｓ176 ～ Ｓ186は細長で黒曜石製の凹基無茎石鏃で、形態的にバラエティに富む。Ｓ187 ～ Ｓ193は黒曜石製の石鏃未成品である。Ｓ194 ～ Ｓ197・Ｓ199 ～ Ｓ202はサヌカイト製の凹基無茎石鏃、Ｓ203は小型のサヌカイト製の平基無茎石鏃である。

石匙には横型Ｓ 204、縦型Ｓ 205 があり、いずれもサヌカイト製である。Ｓ 192 は黒曜石製の石錐である。Ｓ 208 ～ Ｓ 210 は楔形石器で、Ｓ 208･209･211 は黒曜石製、Ｓ 210 はサヌカイト製である。二次加工のある剥片のうちＳ 215 は黒曜石両極剥片、Ｓ 212 ～ Ｓ 214 も黒曜石製である。Ｓ 216 は黒曜石原石である。

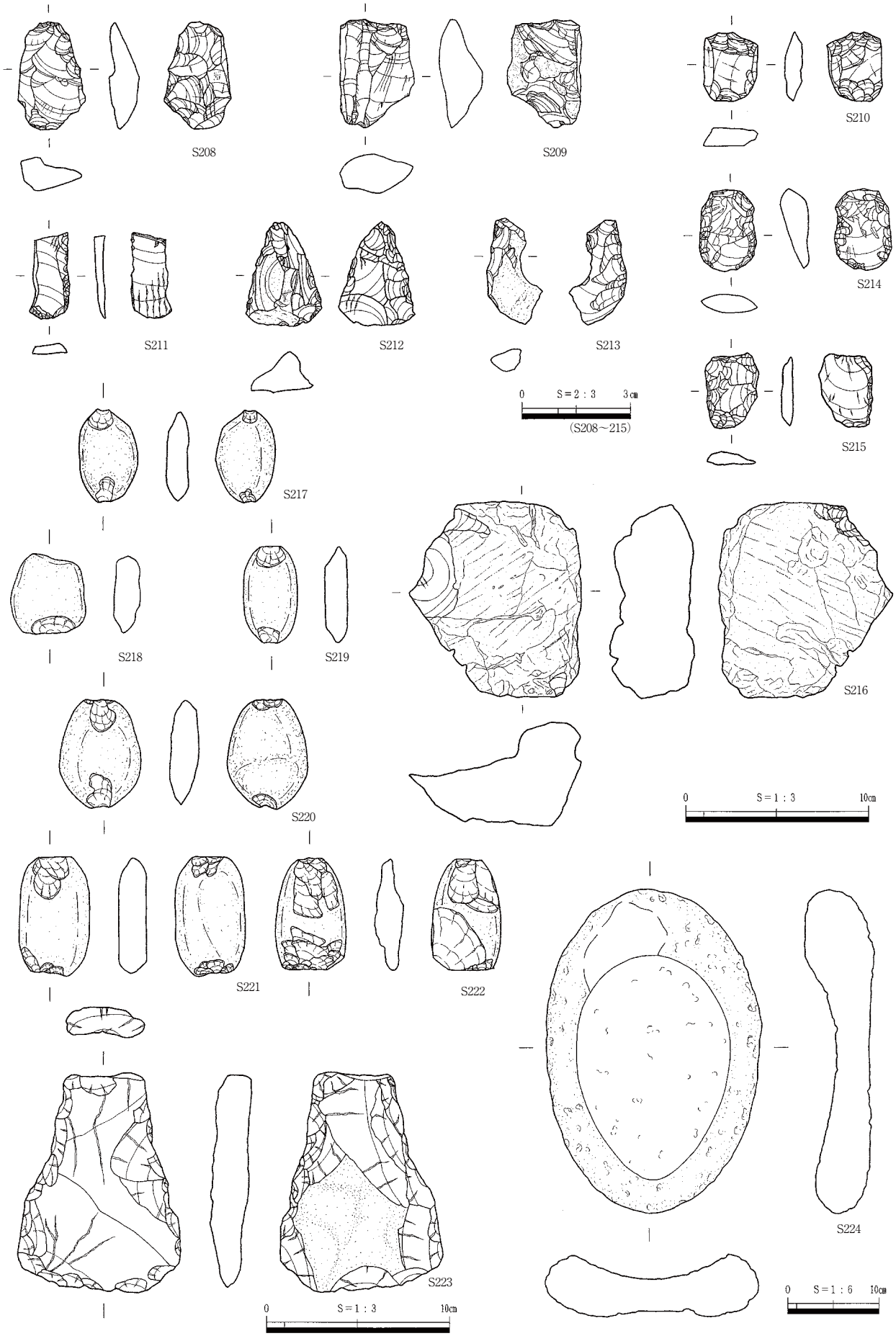
第96図　その他の縄文時代出土遺物（１）



第97図　その他の縄文時代出土遺物（２）



第98図　その他の縄文時代外出土遺物（３）



第99図　その他の縄文時代出土遺物（４）

石錘Ｓ 217 ～ 222 はいずれもデイサイト製の打ち欠き石錘である。Ｓ 223 は小型硬質安山岩製の打製石鍬、Ｓ 224 は溶岩製の大型石皿で、よく使い込まれ使用面が大きく窪む。

９　西区谷部出土石器の様相（表２）

本遺跡では西区から5,465点、5,516gの剥片石器と、70点、53,309gの礫石器が出土している。西区以外の出土点数は45点に過ぎず、そのほとんどは剥片と砕片であるので、ここでは西区の石器を取り上げる。西区では土坑など縄文時代の遺構からは合わせて250点ほどの剥片や砕片が出土しているが、遺構に伴う可能性のあるものは少ない。したがって、西区出土の石器をまとめて扱い、その傾向を述べる。出土した縄文土器の多くは中期から後期にかけてのものなので、石器も大半はこの時期のものと考えてよいであろう。

剥離物

剥片石器の石材としては、黒曜石とサヌカイト以外は利用されていない。黒曜石とサヌカイトの比率は重量では約１１：１で、圧倒的に黒曜石に依存する。後晩期を中心とする殿河内上ノ段大ブケ遺跡でサヌカイトが主体的に用いられる点とは好対照をなす。後期のある時期に本地域と瀬戸内方面との強い関係が生じ、石材の入手経路に大きく影響したと考えることができるかもしれない。

１点出土した黒曜石の原礫は、遺跡に搬入された原材の形態を示すものとして重要である。石核が29点存在し、中には大型のものがあることから、未剥離か作業初期に近い状態でもたらされたことが推定され、隠岐の原産地からの直接に近い入手を窺わせる。砕片の中には押圧剥離の特徴をよく示すものが多く含まれ、少なくとも221点を数える。その多くは石鏃の製作時に生じたものとみられ、原礫から石器の製作までの作業が付近で一貫して行われたものと考えられる。

剥片石器

剥片石器の中心は石鏃で、黒曜石とサヌカイトの比率は約６：１である。剥離物の構成比から考えるとサヌカイトが比較的大事に扱われていることになろう。黒曜石製石鏃では、明らかな使用による破損が認められるものが４点しかないのに対し、製作時の事故によって破損したものと未成品が計55点も存在する。石器製作が西区の大きな役割であったことを示している。

サヌカイトは総量が少ないにもかかわらず石匙や削器などでは多く利用される。とくに石匙は５点すべてがサヌカイト製である。石器の機能に関係して、より丈夫なサヌカイトは耐久性が求められる道具に好まれたのであろう。

礫石器

完形品をはじめ石皿が４点出土していることは、生業を考える上で重要である。石皿にのみ用いられる溶岩は、原産地不明ながら多孔質であることが好まれて特別に選択されたものと考えられる。

石錘には打欠と切目のものがあり、前者が多い。60g前後の軽いものと150g以上の重いものの２種類に分けられ、何らかの機能の差を反映していると思われる。

石鍬が２点しか存在しないことも、多数の石鍬をもつ殿河内上ノ段大ブケ遺跡との好対照である。本遺跡でも突帯文土器が一定量出土していることを考えると、遺跡の立地や機能の差が要因の一部である可能性はある。もし、時期的な変化と捉えることができるとすれば、石鍬の需要とサヌカイトの流入にはある程度相関があるかもしれない。サヌカイトに見られる瀬戸内地域との関係強化の背景に、石鍬を必要とする農耕の伝播を想定するのは考えすぎであろうか。

表２　赤坂小丸山遺跡出土石器集計表

剥片石器

		剥離物									石器													総計
		剥片	砕片	石核	両極			熱	原石	計	石匙	石錐	削器	加工剥片	調整体	石鏃							計	
					削片・剥片	調整体	石核	剥離物								完形	製作事故	使用破損	欠損	未成	破片	計		
黒曜石		1,043	3,847	29	79	54	19	40	1	5,112		1	3	109	1	12	21	4	5	34	14	90	204	5,316
	(g)	2430.3	1028.9	150.4	171.2	160.0	117.0	172.5	528.0	4758.3		3.6	46.8	210.8	3.8	7.1	10.8	4.9	2.2	41.4	2.3	68.8	333.8	5092.1
サヌカイト		49	58	1	8	6	0	0	0	122	5	1	2	4		3	2	3	1	4	2	15	27	149
	(g)	170.1	27.9	9.9	29.2	46.6	0.0	0.0	0.0	283.7	26.4	0.8	6.4	96.0		2.3	0.7	2.9	0.8	3.7	0.6	10.9	140.5	424.2
総計		1092	3905	30	87	60	19	40	1	5234	5	2	5	113	1	15	23	7	6	38	16	105	231	5465
	(g)	2600.4	1056.8	160.3	200.4	206.6	117.0	172.5	528.0	5042.0	26.4	4.4	53.2	306.8	3.8	9.4	11.5	7.9	3.0	45.1	2.9	79.7	474.3	5516.3

礫石器

		磨製石斧			石鍬			石錘		磨石	敲石	凹石	石皿	台石	計
		完形	破片	剥片	完形	破片	剥片	打欠	切目						
安山岩		1		1	1	1	1								5
	(g)	64.5		1.7	275.0	283.0	55.0								679.2
玄武岩				2											2
	(g)			4.1											4.1
溶岩													2		2
	(g)												9673.0		9673.0
花崗岩		1								3					4
	(g)	411.0								2436.0					2847.0
デイサイト		1	1					15		20	6	4	2	1	50
	(g)	415.0	416.0					2059.0		13273.0	2340.0	2977.0	14446.0	3752.0	39678.0
頁岩			2												2
	(g)		212.0												212.0
砂岩		1													1
	(g)	106.0													106.0
粘板岩		1							2						3
	(g)	2.6							45.0						47.6
蛇紋岩		1													1
	(g)	62.1													62.1
計		6	3	3	1	1	1	15	2	23	6	4	4	1	70
	(g)	1061.2	628.0	5.8	275.0	283.0	55.0	2059.0	45.0	15709.0	2340.0	2977.0	24119.0	3752.0	53309.0